

山城志

第2巻 2号

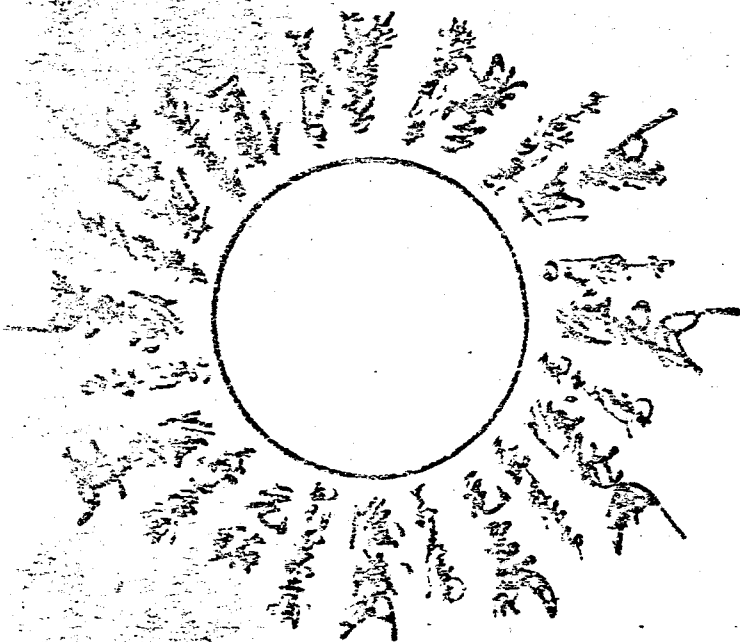
1983年 春の号

山城志 第二巻 第二号
1983年 春の号
編集者 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会
発行所 山城部史探訪の会

山城部史探訪の会
研究部会編

《目次》

P1	備後に於ける宝篋印塔	井川博之
P13	資料紹介『備後国福山御領命古城記』	帝釈英人
P19	続・備前中世山城跡の現状	田口英夫
P30	古代山城症候群 Part 2	栗田英樹
P36	古代山城を訪ねて	七森英人
P42	田坂全慶入道之死 (後列)	藤井高一郎



備後国福山御領命古城記
 帝釈英人
 藤井高一郎

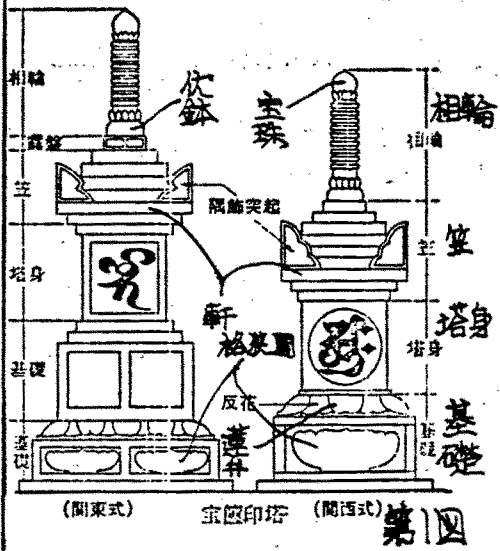
備後に於ける宝篋印塔

井川 博文

宝篋印塔とは、宝篋印心呪巻を納める塔としてこの名が生じた。五輪塔と並んで広く普及した塔形である。宝篋印塔は、上から相輪、笠、塔身、基礎の部分から成る。基本的な関面式と、地方色の関東型があり、備後では前者の関面式であり、関面式とは基礎、基壇の各面が1区で、関東型とは前者で1区のところを2区とした物である。

主に年代判定として、上から宝珠(相輪)・伏鉢生(隅飾)・塔身蓮弁・格葉間などが判断する。

本文に入る前に宝篋印塔について基礎的な事を述べたい。

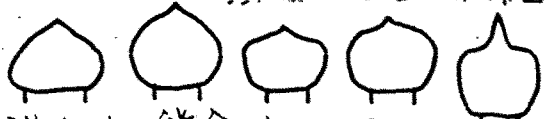


第1図に於いて、左側が関東型、右側が関面式。
 ・相輪は、九輪部が鎌倉中期以前には、下から上に向かって目立たぬほどに細まり、輪の刻出もおおまかな感じである。
 後期ではこれに似て、輪の刻出ちはっきりしてくる。
 室町時代ごろから九輪部が上方へ目立って細くなってゆく

傾向がある。桃山・江戸時代では、あたかも傘を立てたようなまずい形のものが多い。

・宝珠では、鎌倉中期以前のは、少しおしつぶしたような形のと、反対にやがて高くて鐘の蓋に似た形のものがある。

後期になると両側の曲線に張りのある宝珠形が

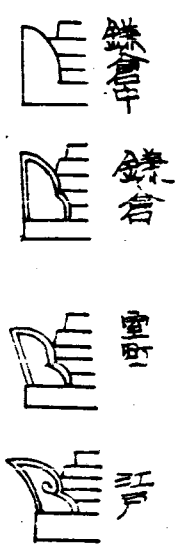


見出し、頂点をわずかにとがらせたもの。

鎌倉前 鎌倉 室町 江戸 諸大輪はから頭が張り、

(編集者注) 本来ならば此論文は「高塚」誌に載すべきですが都合により此に載す

裾ですばまった宝珠があらぬ。室町時代以後では両側の曲線が張らず直線に近くなると、かたい感じが段々進み江戸時代では頂点をおそろしく長くとなす物ができた。



第2図

○第2図は、宝篋印塔の笠の腰飾の時代様式を表わすものである。

鎌倉中期には、内側の弧線1つで、軒と区別せずに刻み出し、外側の直線が直立する。

鎌倉後期には、最も整美な形を成し、腰飾の外側線を心若く外へ傾おけて造る。

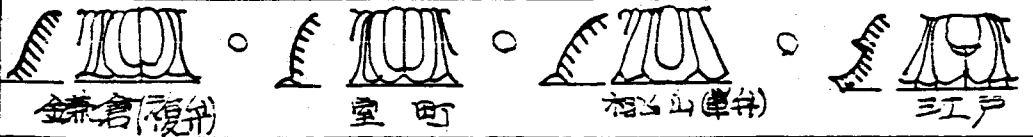
南北朝時代には、二弧で大きく開く。

江戸時代には、花卉のように厚かえったのが見られる。

○蓮弁は、立体的に刻み出したものと、側面輪を薄肉や線刻するものがある。

弁の形式としては単弁と、中央の線で2つに分けて左右2つの隆起を作った複弁とがある。

弁と弁との間に見せるのを間弁または小花という。



○第3図は、格菱間と基礎に使われる文様である。

鎌倉時代は、花頭曲線と両側の曲線も張りがあり、力強さがある。とくに内部の格菱間をふくらませて立体感を示すものが多い。室町時代では、花頭曲線が基縮し、両側線も直線的に弾力感を失い、格菱間の形だけ線刻して内部を彫りしずぬものもある。



○彫り文は美しい平瓦式と、鋸組風のある葉研彫がある。

葉研彫とは、断面が葉の形に似ているものをいう。

平瓦式は、鎌倉末期から江戸時代にかけて。

こゝには、内福寺宝篋印塔・赤坂八幡宮宝篋印塔・
 白隈城跡宝篋印塔・石有地人宝篋印塔・厚山宝篋印塔
 (いこう山宝篋印塔)・吉備津神社宝篋印塔・坪内宝篋印塔
 正光院跡宝篋印塔・真葛山宝篋印塔・全壽寺宝篋印塔
 寒水寺宝篋印塔、12ヶ所を取り上げる。
 しかし此以外にも立三叉塔のものが存在するが、ここでは此の23
 を取り上げて吟味することにする。

1. 厚山宝篋印塔

新市町大字金办厚山にあり、その内の1基は昭和33年1月18
 に黒重要文化財に指定された。

花崗岩製で、1.2mほど。宝篋印塔(花崗岩製)は3基、五輪
 塔(多数在り)、粒状石灰岩(ごめ石)製のものがあつた。

ごめ石は、比婆・高梁川付近で産出する。

宝珠は半球形に近く、南北朝の特色を指すと思われ、笠は
 下二段上六段の隅飾は二弘輪郭付で内部素面の定形式。

塔身は四方に金剛界四仏を梵字で刻す。

基礎は上に中央複弁の左右に間弁を入れて隔ち複弁の反転
 を刻出してゐる。

七重の塔
 奉結石塔
 右志者相堂
 〇長禪堂
 慶暦二年庚申七月廿五日

この内の1基に左の銘文が刻してあり、康暦2年(1380)
 は今から607年前の物である。

昔後には、正確かではあるが天神山城と推された城
 が在り、それと関係のある武士の17回忌の供養のため
 に造られた物があつた。

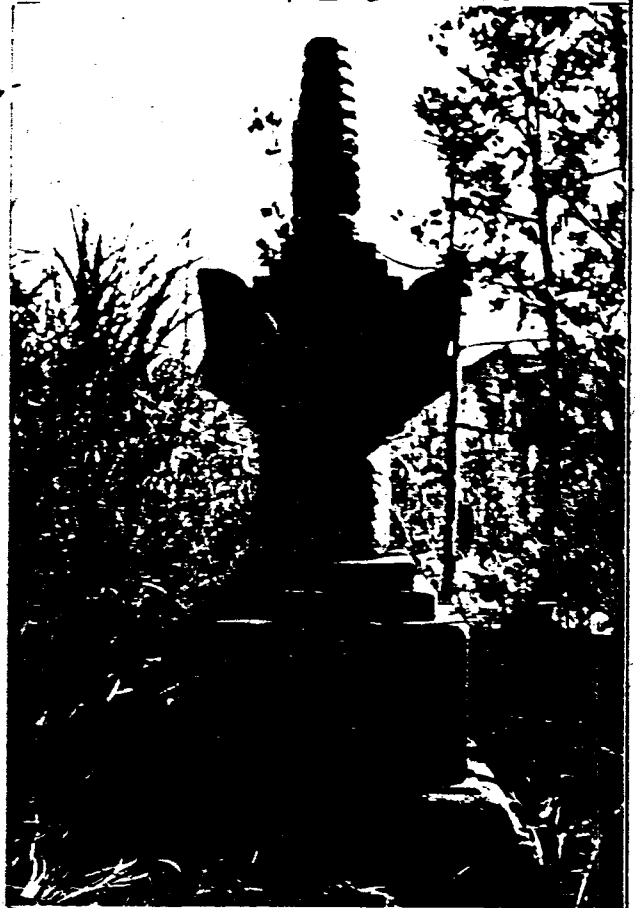
この宝篋印塔の細部を考慮しても、南北朝後期と思
 える。これは銘文の年代とちがふので、この銘文
 は後に刻まれたものではあるまい。

2. 吉備津神社宝篋印塔

新市町大字宮内に在る。花崗岩製。

右輪の宝珠が欠失している。右輪は輪の刻
 入が深まり、その縁が鋭利に突出してゐる。

るう。九輪部が上部へ目立って細く歪んでいる。
 笠は下2段上6段で、隅飾は2弧で輪郭を巻いていて、内
 部は素面。軒は厚く、隅飾は背が高く外傾がやや目立つ。
 塔身は、本体としくりいかず他の物と思え、付近には同形の
 笠と基礎が散在している。
 造立年代は、南北朝時代末
 終わりの1370年頃であろう。
 付近には、三段の層塔がある。
 しかし播上の笠は宝篋印塔
 の物らしい。相輪は九輪部の
 4輪目まで残し以上は欠失
 している。この笠は前に述べた
 宝篋印塔より新しい。
 これは層塔の2段と宝篋印塔
 の笠と合わせて3段にして
 いる。もともと層塔とは層数は奇数
 に造るものであるそのためか。



3.伝有地氏宝篋印塔

福山市芦田町下有地久田
 谷本安寺にある。

総てで8基あり、前列に6基、後ろに1基、すしは奪れた所に1基在る。
 相輪の半分以上は欠失した状態に、風化がはげしい。
 前列で右側から3番目迄は、基礎を2台重ね、その上に笠・相輪を重ね
 たり、他も後に散在していた物を組み立てたと思える。
 宝珠は総て存在しない。笠は下2段上6段が4基、下2段上5段
 が3基在る。もし笠を下2段上5段に造れば、寺間が省け、負担
 が軽くすむ、いわゆる籠絡形式とみられる。
 隅飾は、少し外傾している。風化が激しいが輪郭は2弧と素面
 がわかる。基礎は上に中央覆井の左右に間柱を入れている。
 この宝篋印塔は、1370年頃造立と思える。
 しかし前列の右端に基礎、石段、3番目の相輪は別の物と異なる。

(白隠寺日隠城の宝篋印塔)



4. 日隠城の宝篋印塔

新市町に在る日隠城の近郊にある、日隠殿と呼ばれている。

相輪は存在せず、笠の下二段五筋で、隅飾は少し外に傾むき素面である。前にも述べたが笠の縁を冠すことにより、手間や負担を軽くすむ。簡略形式塔身には梵字だけを刻している。

基礎は、上に二筋を造っていて銘文を陰刻している。銘文は次の通りである。

夢	願	十	延
阿	主	一	文
弥		月	元
		日	年
		丙	申

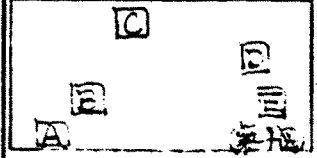
延文元年とは、1356年のことである。

基礎には、格狭間は存在しない。笠・塔身・基礎などに簡略形式が見られる。

銘文が後に刻されたものでないといえれば、1356年は南北朝中期にあたる。銘文だけを後に刻したのかもしれない。

5. 寒水寺宝篋印塔

梨安郡神双町面中条寒水寺にあり、宝篋印塔は5基あり、総じて相輪は存在しない。



第4図は、宝篋印塔だけの主要配列を表わしている。

第4図のCは、相輪・基礎は無い。

笠の下2段より5筋で、隅飾は2筋の輪郭を造るにいて、内部はすべて素面を大きく外傾している。そして裏は空に見える。

塔身は、月輪の内部を凹ませて梵字を陰刻している。
第4図のA、B、D、Eは特に風化がはげしく笠の隅飾は欠失して
いる。糸ノ軒かとも厚い。

A、B、C、D、Eのうち、A、B、D、E笠は下2段と上4段であったと思う。
塔身も風化がはげしくてよくわかりませんがBは、月輪に梵字、Dは梵
字だけを刻している。

基石礎も風化がはげしい。Eの格狭間は扇形の物を配している。

A、B、D、Eは基礎の上に2段を造っている。

A、B、C、D、Eは、粒状石灰岩に石灰石であることや、軒かとも厚い
ことなどの共通点が見られる。

A、B、D、Eは、基石礎の上に2段を造っていることと、笠が下2段と
上4段であることなどの共通点が見られる。

A、B、C、D、Eは部分点に誇張した傾向が見られる。

必なる宝篋印塔は江戸時代の墓と寄せ集めしている。

必なる宝篋印塔を細部まで見ると、造立は江戸時代であるとい
かと思われ。

6. 実勢坊宝篋印塔

場所は福山市金江町金見

京近尾実勢坊で2基宝篋

印塔が本堂の前に建っている。

双方とも花崗岩製である。

右す、右の塔が3階建てである。

左す、左の塔は無く、笠は下2段と上6

段、2段の輪郭付で内部は素

面を隅飾の外に傾むをとし

て隅に立っている側の輪郭を

下へ出ると造っている。

塔身の4面には、月輪や

蓮華を刻みずに直接金

剛印の線子を陰刻して

いる。(江戸時代と見られる塔)



その両端には、計16字を陰刻している。

これは右上に示している。

永和4年は1378年。

千支を斜めに入れるのは、寛明時代以降の
(江戸は横に入れている)

基礎は、上に中央複弁の左右に間弁を入れ
隅にも複弁の反花を刻出している。

格柵間は4面に配している。

基礎から突きまで(基礎は除けた)の高さは

81cm。此の宝篋印塔の年代は銘文の通り南北朝後期の
特長を示している。

・左側の宝篋印塔は火事に遭っている。そのため細部がはつき
しない。

相輪は無い。笠は下2段上6段で、隅飾は2弧輪系付で内
部は素面の定形式。(右塔と同じ)

隅飾は右塔と同じたけ外に傾むく。斬は薄い。

基礎は上に中央複弁の左右に間弁を入れ隅にも複弁の
反花を刻出している。

首が途く、全体に小規模である。年代を判定を行うと初山時代
造立と思われる。

一 結 印 塔 白 鷲	キ リ ノ ク	永 和 二 年 戊 午 九 月 日
----------------------------	------------------	---

7. 石福寺宝篋印塔

此の宝篋印塔は尾道市西蔵町石福寺の本堂の左側に在る。

宝篋印塔は花崗岩製。

相輪は宝珠と伏鉢を欠損している。

笠は下2段上6段で2弧の輪系を巻き、その内に蓮華
笠上に月輪を薄肉彫りして、月輪内は素面である。

隅飾はなし、外に傾むき、斬は厚い。

塔身は、上に蓮華座上に月輪を線刻して、内に金剛
冠の縁を配している。蓮華座は5弁あり、かつている。

窓は二葉形彫りである。

基礎は、上に中央複弁の左右に間弁を入れ隅にも複弁

の反花を刻出している。

正面3面は格狭間を配していて、背面に6行(計30文字)を陰刻している。

貞治3年星は1364年である。

格狭間は全体的に膨れを感じに持っている。

高さは182.4センチ。

大	大	法	右
工	願	治	志
	主	三	趣
行	真	年	者
信	阿	辰	為



(写真：万福寺宝篋印塔)

8. 赤坂八幡宮宝篋印塔
場所は、福山市赤坂町中組鹿田に在り、花崗岩でできています。

相輪は5輪目を折れているのを今はつぎけていて、他はよく各備している。篋は下2段上6段の2弧で輪郭を巻いていて、軒に垂直に立っている。

基礎は、上に中央複弁で左右に間弁を上り隅にも反花を刻出している。そして各面に格狭間を配して、格狭間は左右各個の角を極端に寄せて造っていて細部を見ると、宝珠の場

南北朝時代の特色はまた見られる。

全体的に大きく、重厚で、安定感がある。

年代判定をしてみると鎌倉時代末期の1320年頃に造立したものである。

そうすると、石田東田納所米山寺の元禄三年(1696)宝篋印塔に近い頃に造られたと思う。

9. いくおか山宝篋印塔

場所は、福山市赤坂町1番組いこうか山に在る。
いこうか山古墳の隣。

花崗岩でできていて、相輪は無く、笠は下2段上6段。
隅飾は2弧で輪郭を巻いていて、内部は素面である。
そして、少し傾むいている。

塔身は、梵字も銘文もない。しかし以前にあたかも彫り残し。
基礎は、上に中央複弁で左右に簡弁を入り、隅にも反
花を刻み出している。

各面に格狭間を配している。

略寸

基礎	(底辺・49cm×高さ・25cm)
塔身	(底辺・25cm×高さ・24cm)
軒	(底辺・45cm×高さ・3.5cm)

ここで宝篋印塔の略寸を上げておいたが、
塔身に目をやると気づくと思うが、わずかに
底辺より高さの方が低い、これは他の宝篋印
塔にも見られることだが、これは背を低くすると
錯覚のため、正方形に見えるようにしてある。

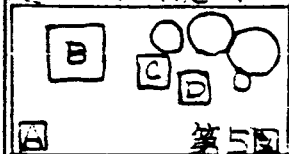
これは鎌倉後期の物に見られることが多い。

この塔は將軍塚と言われている。將軍とは足利義
昭のことを言う。しかしこの宝篋印塔の造立は
1378年頃に造られたのではないかと思われ、義昭と
は年代が異なる。

10. 金持所在宝篋印塔

福山市熊野町金持に4基の宝篋印塔と五輪塔
が散在している。

第三図は簡単に配列を書いてみた。A B C D (正方形で表れし)は



丸は五輪塔で表れしている。

先ずAは粒状石灰岩にこめ石である。風化が
激しい。相輪もなし。

次にBであるが此れはこの中で一番大きい。

宝珠と相輪の1部を欠失している。

伏鉢は少し大きくなっている。

笠は下2段上6段で隅飾は2弧輪郭付で内部は表面で、外傾している。

塔身は、月輪・蓮華座は存在せず梵字を陰刻している。

基礎は上に2段を造り各面に格狭間を配している。

Cは相輪は無く、笠は下2段上5段。塔身は梵字のみを刻す。

基礎は上に中央複弁の左右に間弁を入れ隅を複弁の反転を刻出している。各面に格狭間を配している。

Dも同様である。しかし笠は下2段上6段である。

B・C・Dは相叙的か西の同一時代の物であろう。

此れを検討すると、竟兆朝を終り頃であろう。

11. 坪内宝篋印塔

ここには2基の宝篋印塔と多数の5輪塔が散在している。

ここには2基の宝篋印塔の内、西側にある基を考へ。

相輪は宝珠と9輪の上から3輪までをのこしあとは存在しない。

笠は下1段上4段で、軒の1つ上の段は特にふとく造っている。

塔身は向を刻している。

基礎は上に中央複弁の左右に間弁を入れ隅を複弁の反転を刻出している。

格狭間には各面には配してはいない。

全体に規模は小さく、秘山時代の物と思われる。

もう1基はこれと同形式である。しかし笠は下2段上4段である。

12. 正光院跡跡宝篋印塔

福山市山野町山野寺跡

ここに3基の宝篋印塔と5基の5輪塔と5基の塔がある。

3基のうち1基の宝篋印塔の内、上から1基と他の粒状石の石の中心に書かれた。

(写真) 正光院宝篋印塔



この写真を表
にしてみたい
左からA・B
C・Dとしてお
く。

(築の図)

	相輪	笠	塔身	基礎
A	昔相輪の6 輪目が折れ ていた。相輪 は目玉の細 く、その上 輪の刻はあ る。	下2段上6段 隅飾は23の輪 郭付・内部着面の 定形式	蓮華座上に月輪を ともに華肉彫りし、 月輪内に梵字を彫刻 している。	基礎の上 に2段を造 ている。
B	宝珠は無い。 Aと同じ。 □の 伏鉢の形。	Aと同じく定形式。	Aと同じ。	Aと同じ。
C	相輪は全部 ある。輪の刻 目が深い。 □の 伏鉢の形。	Aと同じく定形式。 しかし隅飾がA・B より外側から出ている。	Aと同じ。	基礎の上に 2段を造り、 その間に5 段の隅飾を 刻んでいる。
D	相輪は全部 ある。Aと同じ。 相輪の輪 目が折れ、その 上輪の刻はあ る。	Cと同じ。	Aと同じ。	Cと同じ。
	A・B・Dの伏 鉢は同じ。	この伏鉢の形は A・B・Dの伏鉢と 同じ。	A・B・Dの蓮華座は異 なり。	

5番目の宝篋印塔は、粒状石灰岩(この石)でできている。
塔身には"白壁"と刻してある

第1図を見るとA・BとC・Dがおのおの相似点がある。

Aの石がより大きくA・B→C→Dと小さくなる。

A・BはC・Dは古いと思え、A・Bは1365年から1370年頃に造立
初在物であるう。そしてC・Dはそれより数百年後に造立した物である。

これに在る粒状石灰岩(この石)の宝篋印塔を築してなるのは
時代の物でしょう。

A・B・C・Dの宝篋印塔は又であけは吉備津社神宝篋
印塔とよく似ている、しかし細部を見ると違いがある。

造立年代も近く"白壁"という銘文と雲との関係在り、吉備津
社神宝篋印塔と関係が在りそうだ。

○今迄あげた12ヶ所の宝篋印塔をまとめてみると

前期(佐保宝篋印塔、石福寺・吉備津など)は大型で重量
感がある。

中期(山形山・奥蔵坊)は少し小さくなる。

後期(佐有地・坪内・寒水寺)はR型化し、不定形形式で
硬直感があるようだ。

次に塔の型を分類してみると。

- 下2段上6段 19基
- 下2段上5段 5基
- 下2段上4段 5基
- 下1段上4段 1基

新しくなるほど定形式(下2段上6段)が3、下1段上4段と
段上が減っている。

資料紹介

文責 帝釈原人(田口)

備後國福山御領分古城記 (参)

備中後月郡

高屋 陶山 藤三 義高

此仁元弘之頃之人也 備中=於多乙討死 墓石

備中吉井村=アリ

小見山 左衛門

藤井 能登入道

品治郡(備後)

山守村上 土肥 和泉守 盛平

文安年中之夏也 代々墓所東、林ト云所=アリ 元和二年

破却ス物見屋敷ト云所有 代々之寺アリ 山下=家形跡

有之

同 下 光成 左京進 高正

同 三好氏

今 岡村 山内 刑部

同 土居 長松寺 開基

大橋村 近藤 民部

江良村 江良 与市 太郎 忠実

岡崎四郎義実之末流 三浦大輔之弟也 延元年尊氏

到 岩成之庄ヲ賜フ

倉光村 倉光 次郎 実重

右同断也

中島村 中島 三郎 延実

同 石崎 小四郎 義実

石中島村今岩崎山ト云不此元跡ト(欠字)

石路信実屋敷津取入等以漢字 = 正書リ 城山 / 同 = 雨木村
助元之境山并降天 大戦ス宮長討マケテ一類断絶ス家臣田
上江草其外弓ヨリ長刀(井中=投入) 城=火切ケ焼拂ム或
ハ討死ス二者穿入城門前助元村ト号ス此所=宮信光ノ代
々之寺有禪宗 = 于信光寺ト云

近田村 近田 宗左衛門

戸手村 菩提寺法光寺同氏 = 断絶ス(不明)

同 殿山 城山天満宮 奥 = アリ

同 中 菩提寺長聚寺断絶ス

宮内村 宮下野守 実信

亀地山 又亀寿山共云

兄弟不和 八長州江正良大内 = 仕入弘治年中到毛利 = 附
子孫殺 = アリ 下野守子孫戦死ス家臣丹下江草比喜田渡部
踏原穿入子孫〇有リ

山ノ南之方 = 軍處ト号ス今ハ新市村トマフ

同 トビ尻 宮下野守 元信

同 桜山四郎入道

同 下道 宮越中守 元春

息下野守 = 亀地山 = 置 越中守此所 = 居住ス 今改変井
村ト云

同 下柏 宮刑部 元理

観音山ヨリ良方ツキ間ニツセツカノ峯有之 此城山服部助
元村ト下安井村境ノ山也 石ト山ノ口 = 立木アリ元和年中
〇〇ス散乱シテ有之 宮家子孫断絶系圖記録此時 = 米族
宮氏代々日隈之城也

同上 日隈 肥前守入道

此城山表上安井裏芦田郡常村境(ノ) 山 = 元塔アリ左安井 =
村 = 分ル

雨木村 泉山 宮常陸介 元清

服部村 原城土肥氏

雨木東北境ノ山 = 代々之石塔アリ

同 永谷 山 京原 越中守

芦田郡

福田村 福正遠江守盛雅
 同 利鎌山 光成新三郎直家
 同 同名左京進政行
 同 須供茂塚 有地玄蕃頭

家老嘗祢何某卜力

村上天皇未流

上有地村 有地石見守清元
 同 鳥野興石見守後=居住不
 同 有地美作守
 同 大心小/67 同石見守息民部丞高信
 相方村 同次男美作守元盛
 柞广村 徳毛監物吉明

戸久茂卜毛

栗柄村 大角右衛門尉重門
 土生村

淵ノ上 杉原七左衛門丞

府中村 中村越後守時氏

毛ノ府中 今八府川

出口村 山名伊豆守清氏
 父石村 和知又九郎豊里
 同 同名 又八郎久豊

草卜毛

久佐村

二子山城 樫崎加賀守豊武

湯原左衛門未流

正慶二年尊氏より芦田郡地頭ヲ賜

家臣 出原玄馬

慶長五年落去也

樫崎十兵衛景忠
 同名 左衛門元安

阿字村 登左近吉春

上初左近上王

木野山村 芥川政治郎

同守定 入江大蔵政高

兼木村 金丸宗左衛門

金丸村 島津

同 小松

藤尾村

甲努郡

斗舛村 斗舛

矢田多村 林又右衛門一政

國留村 和知主馬祐吉長

上下村 長谷(部)大蔵左衛門元清

四羽城長谷兵衛信實未流

同 長谷部飛弾守

有福村 有福玄蕃丞

同 竹内弥三郎○清

同 馬屋原備前

安田村 永井伊賀守元政

太良丸村 秋山伊豆守

亀ヶ谷村 福葉備前守

同 内藤河内守

小塚村 伊達左馬之助

同名左京亮信衡

小堀村 新見能登守

家老三村重兵衛親秀

階見村 林四郎左衛門

神石郡

(17)

上野村	田辺美濃守義雄
時安村	渡辺筑後守
豊松村上	内藤河内守
同	上村長門守
同	片山八郎
同	下内藤左馬頭
有木村	

中山東有木少輔

抑吉備津宮別当大祖有鬼氏備中ヨリ備後ニ来リ、代々当國居住ス 中頃氏ヲ改テ有木氏ト云々。

小野村	入江蔵人政貫
笹尾村	

ツ子 掇津守吉照

高松	
新面村	相田対馬守
油木村	

同 大麻山片山志岐守康重

同 梅現山 或人物語りニ高野右近將監ト云

同	土居 矢田貝 対馬
安田村	

	志丸庄七村之内
大矢村	馬屋原中務少輔
小畑村	

	九鬼城	同	但馬守正國
同		同	左衛門大夫
上村		同	四郎兵衛成宗
同		同	備前守元立
同		同	河内守清房
石村		同	蔵人 宗政
光信村		同	
草木村	横山	同	河内守吉春
永野村			

(18)

黒光城 高宮 中書本春
 同 二子城 同 左衛門元安
 同 矢不立城 同 庄三郎元近
 相渡村 秋中 治部大夫
 古川村 毛利 壺崎守勝信
 福永村

今念光

助三丸

(今念釘助丸) 岡 左衛門元近
 同 岡 伯耆守
 同 同 孫八郎
 同 暮ヶ峠 高尾 小十郎
 同 山村氏祖 宮 入道
 木津和村 木津和 助宗
 田頭村 山上 主膳承吉
 高蓋村 有地 九右衛門
 父木野村 入江 大蔵政高

(注) 原本には同左内元近とあるが
岡の間違ひであらう。

右入江兄弟穿入備中高屋ニ居ス 後菟路ニ住ス

(興書)

寛文四年甲辰五月二日

木野山村 弥治 兵衛 先祖古所持致居候
 由ニテ持来借受写置申候

風早采女正 通宗

(おわり)

■続 備南中世山城跡の現状■

——福山ユースドマップクラブの中世山城跡調査報告——

田口義之

本会の前身が「福山ユースドマップクラブ」であることは知る人ぞ知るクといつた感じで御存知ない人も多いであろう。そのユースドマップクラブ、俗称「盗掘協会」は昭和46年から同48年にかけて中世の城跡の実測調査（といつても巻尺を使つたはなはだ簡略なものだが）を行なつていた。当時は何分高校生の子供だ、たため一応の成果を挙げたにもかかわらず世に聞かすべもなく、一部の城跡に就いて「備南中世山城跡の現状」と題するペラペラのパンフレットを仲間内にくばつたのみで他は埋れたままになつてゐる。その後、昭和51年、仲間から「ユースドマップクラブ管轄人」に指定されてゐた私は「こんな貴重な？資料が埋れたままになつてゐるのは惜しいことだ」と思ひ各城跡についての考察等をまとめ「続備南中世山城跡の現状」として発表の機会をうかがつてゐた。しかし、又もその機会は失なわれ、原稿は7年もの間押込みの隅でほこりをかぶつてゐた。ところで、今回『山城志』第2巻2号を発刊することになつて私は困つてしまつた、何分発刊の日まであと5日（只今3月1日）を残すのみで新しい原稿をものにしようと思つても良い案が浮かばないのである。そこで思つたのがこの原稿、さつそく押込みをガサガサやつてみると果して黄ばみながらも残つてゐた、ま、たくなまけ者の窮余の一策であるが今回はこの原稿で間に合せてもらうことにしたのである。但し、何分古いものなので現在では通用しやうもない論証も多くある。しかし、私はあえて原文のまま載せることにした。それはこの文章に「かつて共に汗を流し、いばらにキズつきながら山中を走り廻つた仲間達といつし、共に書いた」という意味を持たせたい為である（現在の私が同じ主題

(20)

でパンを取れば「備陽史探訪の会城郭研究部会」の田口としての意識が入ってしまう。……どうもなまけ者の弁解じみて恐縮です。）

収録山城跡

西山城、滝山城、竜王石山城、山王山城、要害山城、正戸山城、天神山巖城

調査参加者

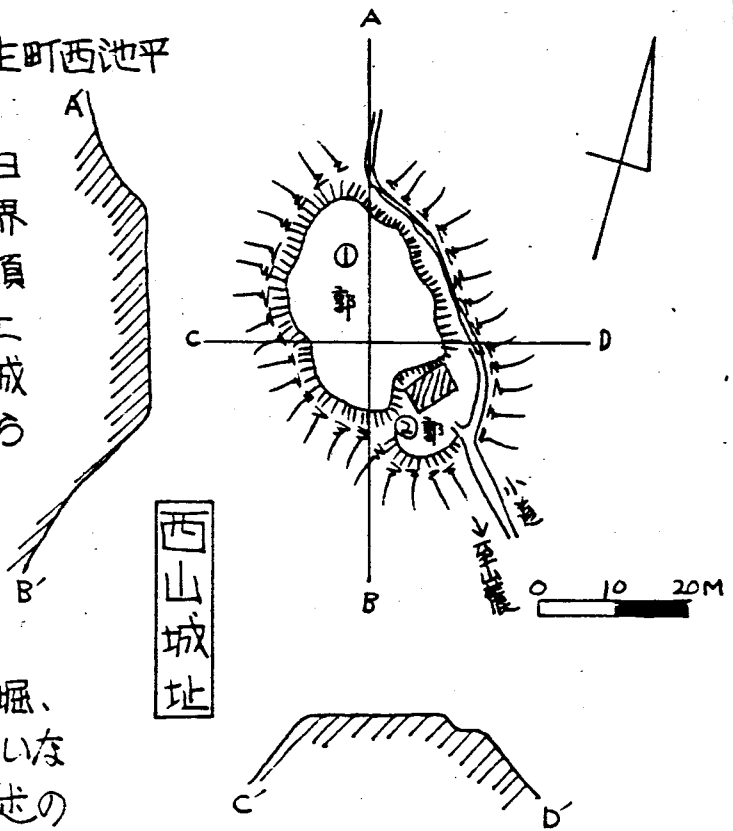
田口美之、 岡内譲二、 七森博明、 関戸和典
松本信二、 猪原 進、 柏原正尚

にし
西山城跡 (別名 池原城 神原城)

所在地 福山市坪生町西池平

現状 坪生町、春日町と深安郡神辺町の境界上の標高180m余の山頂から南東に延びた尾根上に築かれた山城で現在城址南端に稻荷神社が祭られている。

遺構は27m×18mの削平地(①郭)とその南の10m×10mの削平地(②郭)を残すのみで空堀、土塁等は全く残っていない。猶、②郭の方は前述の神社の敷地になっている。



1972.7.2 調査 田口、七森、関戸

(21)

■城主■ 『西備名区』によると 大内氏の家臣、神原伯耆守助宗、同 采女正助春、同 和泉守、同 四郎頼景等、神原氏が代々居城し頼景の代享禄年中(1528~1631)に沼落したという。この神原氏の性格は不明であるが おそらく、この附近の中世庄園坪生庄の名主層と室町期に買得等の方法で田地を集積して力をたくわえ戦国期にこの附近に勢力を伸ばしてきた周防(山口県)の守護大名大内氏の被官となつて武士化した者であろう。

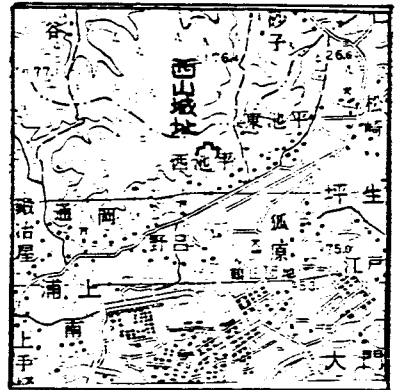
大内義興花押



大内義隆花押



(西山城址附近)



滝山城跡 (別名 三郡山城)

■所在地■ 深安郡神辺町上御領

■現状■ 猪原薫一氏の『滝山城跡に就いて』(備後史談所収)によれば 明治の末頃迄は明らかに城跡としての遺構が見られたが その後、石材採取のため地形が変わつたとのことで 私達が昭和45年踏査した時 矣でも遺構として明確に認められるものは山頂北側に残る20m×10mの削平地のみで 山頂部はなだらかな

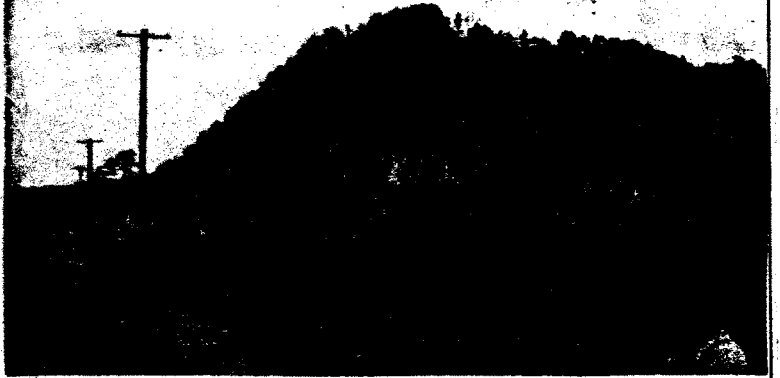


(滝山城跡附近)

(22)

畑地となっていた

■城主■ 『備後古城記』によれば城主、宍戸孫六郎秀安、『西備名区』には宮氏の居城としている。



(滝山城跡) 西方より写す。

宍戸氏は安芸国甲立に本拠を置いた有力豪族であるがその系圖中に秀安の名

は見あたらない、又、宍戸氏がこの地に勢力を伸ばしたことを伝える記録も残っていない。しいて関係づければ天正(1573~1591)末年、宍戸氏は毛利氏重臣として備中に1025石、備後に1116石の給地を有している(毛利氏ハケ国時代分限帳)ので、その所領が備後、備中の境にある当城附近にあつて、その支配のため一族の秀安をこの城に置いたものであろう。

一方、宮氏が居城したと伝えるのは室町時代の中頃、永享3年(1431)、宮上野入道は当時安那東条と呼ばれた御領の領有をめぐる岡崎門跡と争つてゐる(御前落居記録)ことから推定して、御領に勢力を有する宮氏がその所領支配の拠点としてこの城を使用したものであろう。

以上をまとめれば 当城の始築年代、築城者等は不明であるが室町期には備後の有力豪族宮氏が所領支配のために当城を利用し宮氏が亡んだ後天正年間には同じ理由で安芸国の宍戸氏がこの城を利用したのであろう。おろし 山城は戦いの為に築かれたものであるから滝山城も何度が戦のちまたにまき込まれたであらう、しかし、残念ながら記録は何も語ってくれない。

(毛利輝元花押) →

竜王石山城跡

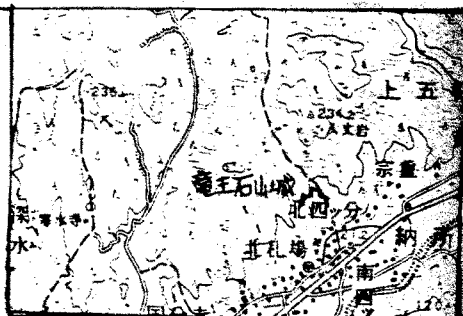
所在地 深安郡神辺町 御領

現状 神辺町御領の北にそびえる八丈岩山塊から南に延びる尾根を利用した山城で 現在、遺構としては42m×10mの長方形の削平地(①郭)とその南に接する10m×10mの削平地(②郭)が存在し、①郭北側尾根続きには巾約10Mの空堀状の窪地が残っている。

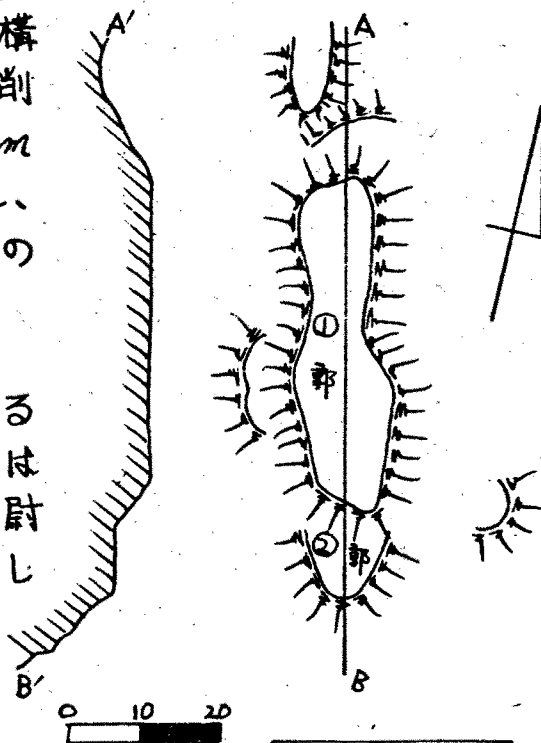
城主 重政氏の居城と伝える。重政氏の家伝では その年代は元弘年中(1331~1333)で平左衛門尉光泰が後醍醐天皇方として挙兵した時、この城に拠ったという。この伝えは他に正確な記録がなく何ともいえないが あるいは この城のある御領はその名の通り皇室を本家とする

庄園であった可能性があり、重政氏はその庄官であったと仮定すれば その関係で元弘の変に際して 重政氏が宮方に応じてこの城に籠ったということは十分考えられることである。

なお、御領の城主として『西備名区』等には目崎氏や神辺城主山名理興の家臣、菊地肥前守、同右近允、安田文次の名前をあげているがその城跡は現在判明していないので 彼等が重政氏のあとこの城に居城した可能性もある、その場合 当城は神辺城の支城としての役割りを持っていたものと思われる。(備陽六郡志に拠ればこの城は別名茶白山城という、この説に拠れば 菊地氏等もこの城に居城したことが



(竜王石山城附近)



竜王石山城址

昭和47年1月15日調査

(24)

山王山城跡

▣所在地▣ 深安郡神辺町湯野

▣現状▣ 五ヶ手山々塊の東側の主峰、標高約2mの山王山々頂に築かれた山城で現在山頂平地に日吉山王神社が祭られている。城の遺構は先述の神社の敷地となっているため明確なものは何も残っていない。ただ、山頂平地の西側に土塁らしき土盛りがあるだけである。



(山王山城附近)



▣城主▣ 西備名区等によると 天文年中

(1532~1554)に宮次郎左衛門が居城し、神辺城主杉原(山名とも)氏と戦い敗れて討死にしたという。宮氏の本拠は天文3年(1534)の龜寿山合戦に敗れてのち中条(神辺町)附近に移ったようであるから その出城として山王山頂の神社を利用したのではないだろうか。その場合、南方の神辺城に拠って備南支配の基礎を固めつつあった山名(杉原)理興の勢力と衝突し、宮氏が敗れたのであろう。

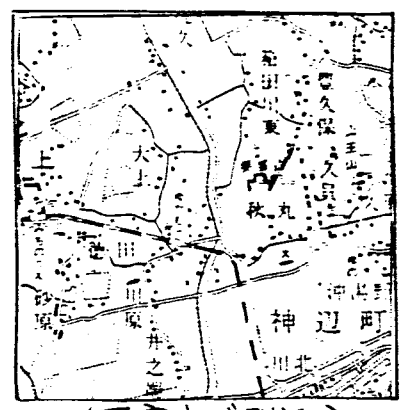
山王山城址土塁?

○調査年月日 1971.3.14

(25)

要害山城跡 (別名 天神山城、茶臼山城)

所在地 深安郡神辺町徳田



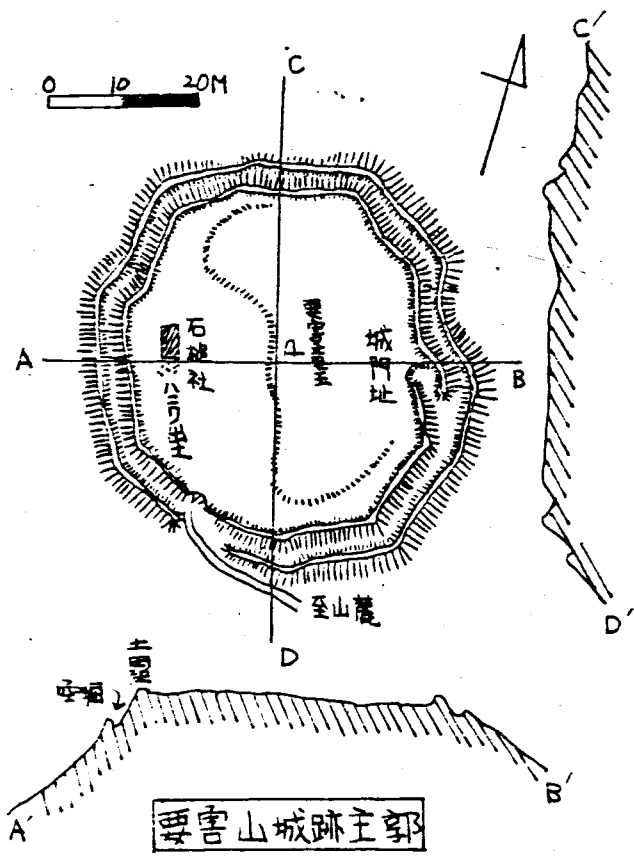
(要害山城附近)

現状 五ヶ寺山々塊の西方の主峰、標高95.9mの要害山々頂に残る山城跡で山頂にある主郭は長径43m、短径40mのほぼ円形の平地である。

『福山市史』上巻(P414)によるとこの城は径40mの大円墳の墳頂部を切り取り、古墳の周壕を利用して築かれたまのとされている。確かに主郭西部に建つ石槌神社の社殿の下からはハニワの破片が出土するが、そのみを以て大円墳を利用した山城とすることはできないであろう。たまたま城の主郭を築く

時、その内にあつた小円墳を破戒したということも考えられるからだ、特に主郭の平地は水平ではなく西側がやや高まっていて、ハニワが出土する(左図)、この高まりを古墳跡と考えた方が良いのではなからうか。

この城跡で特筆すべきことは土塁と空堀の遺構がほぼ完全に残り、主郭東端には城門跡と思われるものが存在することである。土塁の高さは2.5m、空堀の中は底部1.6m、上部3.7mを計り、城門跡は土塁



要害山城跡主郭

5.47.2.20 調査

がくい違ひになつていて、その間が窪地になつていて、おそらく近世城郭の升形門の原初的なものがここにあったのであろう。尚、主郭の他にも南麓にかけて郭跡と思われる数段の削平地が残つている。

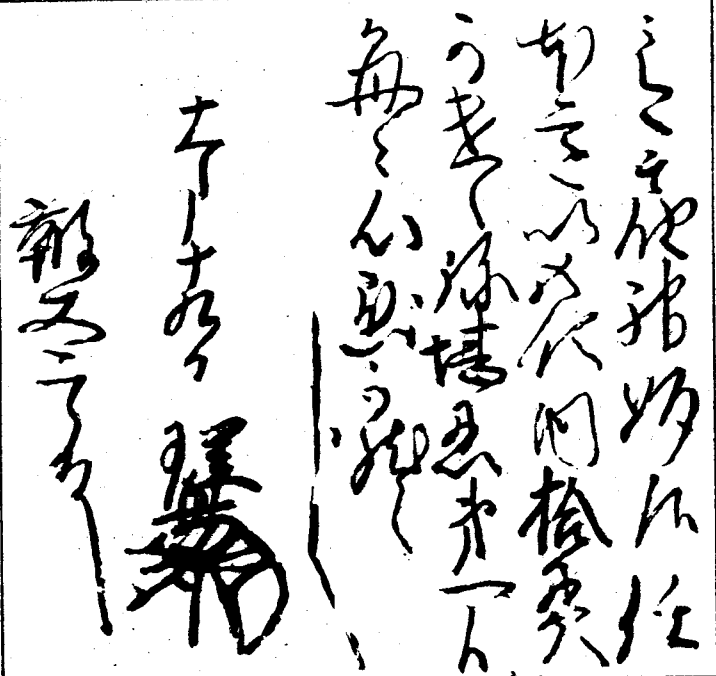
■城主■ 『西備名区』等によると始め宮若狭守が居城し、後、山名清左衛門、平賀隆宗が居城したという。宮若狭守は備南宮氏の惣領で初め龜寿山城(新市町)に居城し、龜寿山合戦に敗れて後安那郡内に移城したと伝える(西備名区)のでこの城に直接居城したとは思われない。『備後国福山御領分古城記』によれば宮若狭守はこの城に城代として山名清左衛門を置いたという、おそらく安那郡北部に勢力を持つ宮氏が南方神辺城の山名氏に対する押えとしてこの城を築いたのであろう。山王山城の項でも述べたよう

に天文年間、宮氏は山名氏と戦つて敗れたという伝えがあるところをみるとこの城もあるいは宮・山名合戦の舞台になつたのかも知れない。

平賀隆宗は安芸国高屋の有力豪族で天文16~

17年にかけて大内軍の神辺城攻撃の一翼となつて秋丸に本陣を置いたという(陰徳太平記)、秋丸は要害山南麓の地名であるから、この時、要害山城にも平賀氏の軍勢が籠つたのであろう。

以上をまとめれば、この城は初め宮氏が南方に対する押えとして築き、その後、神辺城合戦の際、寺守の平賀氏によって利用されたものと思われる。



神辺城合戦の際、家臣の誠又三郎に与つたもの
山名理興感状『三吉鼓家文書』

(27)

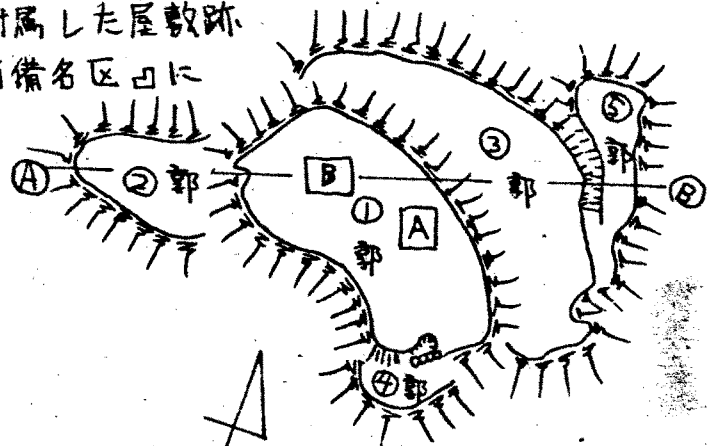
しほと 正戸山城跡 (勝戸勝度とも書く)

所在地 福山市御幸町上岩成字正戸



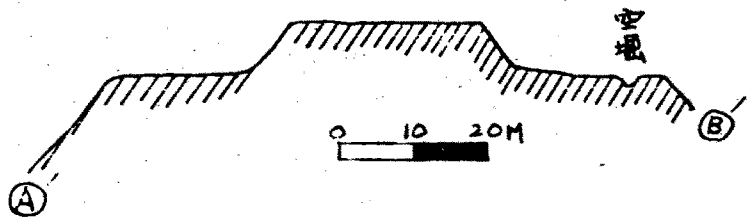
(正戸山城附近)

現状 神辺平野の中央北部に孤立する標高40m余の小丘。正戸山を利用した山城で 現在、山頂平地には石槌神社(A)が祭られ、その西方には気象観測器具(B)が置かれている。城の遺構は山頂の40m×15mの長方形の削平地(①郭)を中心に、その西に17×12mの削平地(②郭)、北から東にかけて長さ56m×巾5~10mの細長い削平地(③郭)、南に13×4mの削平地(④郭)、③郭から東に空堀を隔てて18×5~8mの削平地(⑤郭)の5つの郭跡が残り、①郭南端には虎口状の遺構と石塁が存在する。又、北麓には 現在、水田になっている広大な平坦地があり 城に附属した屋敷跡と思われる。尚、『西備名区』によると この城の西、北、東はかつて沼であったといわれ、山城ではあるが 備中高松城や福山市津之郷町の小森城等と同様、沼城の性格も持っていたものと思われる。



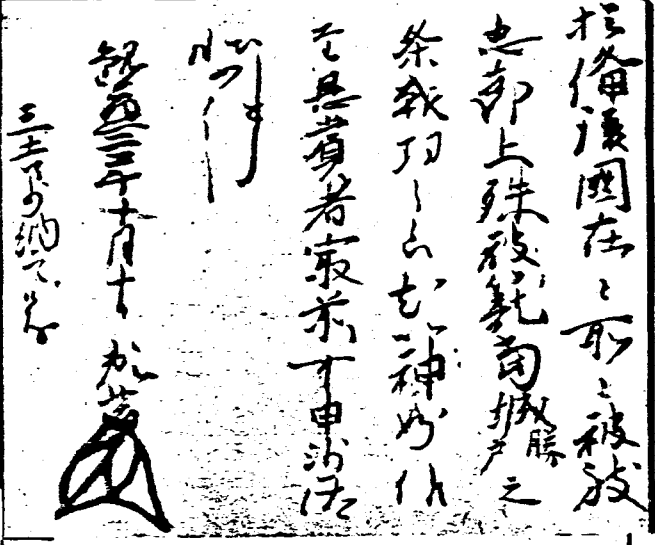
正戸山城址

城主 『備陽六郡志』等によると、この城は小藤美作守が築き、た



めに小藩(ほうとう)→正戸山城と呼ばれるようになった。たとも、宮三郎入道正渡が居城したため正渡山(ほうとやま)城と呼ばれるようになった。たとも伝えるがその年代等はさだかでない。

この城が史上に現われるのは南北朝内乱期と戦国期の2度である。南北朝時代の観応2年(1351)10月、足利尊氏方の備後守護岩松頼有はこの城に籠り、敵対する上杉氏や宮盛重の攻撃を受けている。この時は三吉覚弁等の奮闘によつて敵を撃退しているが



岩松頼有が三吉少納言に与えた感状(御調郡向島町鼓大三氏所蔵)

頼有がこの城に本拠を置いたのは、おそらく、この城が神辺平野という経済基盤を持ち、かつ眼下に山陽道が通るといふ、交通の要衝でもあるという点に目をつけたからであろう。

戦国期に入るとこの城には宮氏の一族が居城したようで、天文年間(1547-1555)の城主として尾子方の宮入道正味の名が伝わる。「関関録」3巻P253「天文16年6月2日付大内氏年寄衆連署状」によると天文16年(1547)4月、大内氏の軍勢がこの城を攻撃している。この時期は、尾子方の神辺城に対して大内勢が総攻撃をしかけた時にあたり、落城した



(正戸山城址)南側

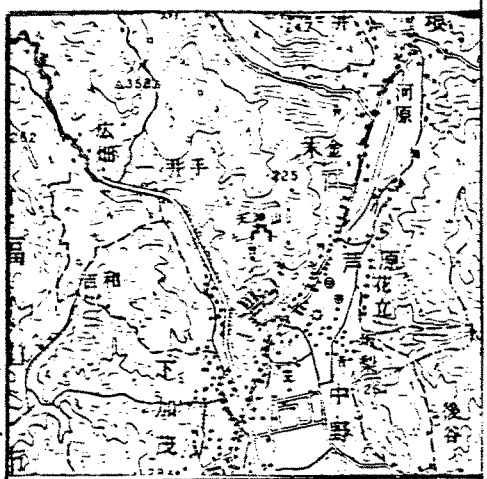
たという記録がないところを見ると、この攻撃は尾子方の宮氏に対するけん制的な意味あいを持つものであつたのであろう。その後には、きりとした記録がないので何とも言へないが、徳備名臣等によると天文21年(1552)

(29)

7月の志川庵山合戦の際、この城も毛利勢に攻められ、正味もよく戦ったが「(毛利勢)の一手は東北の山へ取り上り、少し小高き所より火矢を射かけて攻けるに」というぐあいに火攻めによって落城し、正味も討死にしたという。

なかのてんしん 中野天神山城跡

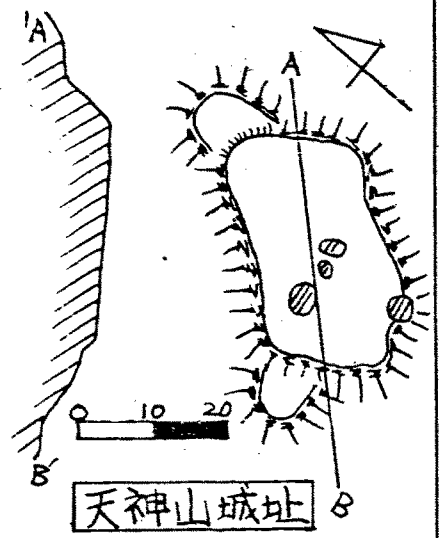
所在地 福山市加茂町中野



現状 加茂谷の北を画する標高180mの天神山々頂に残る山城跡で 現在、中国自然遊歩道のルートとなり休息所が設けられている。城の遺構は山頂の32m×16mの削平地(①郭)とそれに附属する2ヶの削平地(②③郭)のみで、①郭には巨岩が4ヶ露出している。(1972.11.19調査 田口祐原、七條南戸)

(天神山城附近)

城主 『西備名区』によると周防大内家の家臣、内藤伊賀守久安、同伊賀守宗久が明応年中(1492~1500)から慶長5年(1600)迄居城したという、しかし、明応年中大内氏の勢力がこの方面に及んだという証拠はない、『備後国福山御領分古城記』によれば この城には宮氏の城代、栗木兵部近氏や内藤伊賀守、吉田氏の家臣岡本氏等が居城したという。この附近は戦国期まで宮氏が勢力を持っていた地域であるから おそらく、初め宮氏の代官が居城し、天文21年(1552)の宮氏滅亡後、大内氏の家臣、内藤伊賀守などがこの城に拠ったのであろう。



福山市多治米町9/6 (つづく)

古代山城 症候群 Part 2

シンポ-D-4

粟田 東国

☒ 話はまたまた始まらない

2ヶ月というのは何と短いことであるか。ついにこの間『山城志』2号の原稿を渡したばかりの様な気がするが、もう今回のメッキリかせておいて。もっともこの間 例会2回 談話会2回をアース通りこなしており、その他に部会活動を3日程行っているのだから無理もないと言いは言える。ことわっておくが私等は皆、日本の正しい勤め人であり、決して『山城志』のやりて食っている訳ではない。

今だから言おう。私の構想はこうであった。すでに『常城』についての雑感で私の今後の研究の方向は誤またま明らかにしている。

当面の部会の活動としては次の様なことを考えています。①地名の起り ②山岳信仰 ③神社仏閣の成立史 ④古代政治・軍事史 ⑤国府・軍団 ⑥東アジアの古代政治・軍事 ⑦渡来集団とその文化遺跡 ⑧考古学一般。総じて古代山城のはろむ謎をその周辺から解明していく方向…云々。

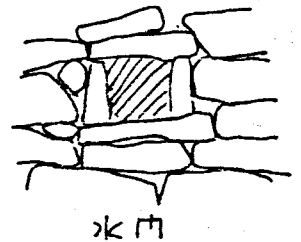
いずれもその一つだけで本の2冊や3冊をきょうな大きなテーマである。つまり私のつもりでは Part 1 において古代山城の概略を述べ、Part 2 からはこれらのテーマにひとつひとつ現象を落すか如く追っていくはずであった。かくしてこの連載は Part 100 になっても終わらない予定であったのに、上述の理由でまた全然実体的に追っていないのであった。幸か不幸か私はこの間古代山城についての発表会もやっており、それか時間の制約と余りの早口でまく痺きとれないと大変不評であったので「どうだ、どうだ、アレかあ、たのた」と想い出し、アレを少しぶくろまして今回はお茶をにごそうと思ふ。賢明な読者には「前回とおんなしじゃねえか、ケッ」と馬鹿にされそうな気がするが「どうもまいりましたなあ、ハッハッハ」と卑屈な笑いでゴマかしてもまるく受けなかったりして。

☒ 講演風に

エー、ただ今研究会に預りましたナツメダでござります。あ、どうもどうも(拍手)。今日は古代山城について発表するということなんですけれども、度を申しますと私

は山城どころか 古代史のものに興味を持ち始めたのが半年前でありまして
こうやって人前で話すこと自体身の程識らずという感じもするんですけどまあ
それはそれとしまして 要するに朝鮮式山城というものは面白い。素人の私がい
と跳び込んでそのままやみつきになってしまう位面白い謎を多く含んでいるとい
うことです。今日これから話しますことは、まあ皆さんかどの位朝鮮式山城に
ついて御存事がよくは解らないのをごすけれど、一応「朝鮮式山城」とは何
か知っている。また見たことがある。しかしそれに対して現在どの位研究とい
うものが、いわゆる学界のごすね。進んでいるのかについては是く知ろないとい
う方がおられるとして、まあいう方を対象にして話を進めて行きたいと思ひます。

この前鬼の城を見られた(1月例会)方は是くお解
りでしょうか。あの様に300~400Mの山の頂上あたり
を石塁や土塁でぐるりと囲む。またその内部に必ず一
以上の谷を囲みそこに石で水門等を造るといのが
典型的な朝鮮式山城というものです。あれを見られて
皆さんか何を感じられたか是く解りませんか。私か
あれを始めて見た時思つたことは、こんな規模の大きな建造物を、それは
例へば畿内の天皇陵などとはへても遜色ないと思ひますが、なぜ自分
は今までその存在すら知ろずに来たのだらうかといふことでした。その後
色々資料などありまして、私はその時ウスラほんやり考へたことが、かな
り川線を一々種類の疑念であつたのだなあと少く自信を持った訳です。
ここに西川宏さんの書かれた『消されていった朝鮮式山城』という論文
のコピーがありますか、これを見ますと山城そのものはかりでなく、わが国に
おける山城研究の歴史の中にも仲々興味あるところが潜んでいることが
解ります。



日本の考古学界では昔から余り論争といったものは少く、少ない論争の中に明治末から大正初めの神籠石論争は文献史家
民俗学者をも巻き込んだ華々しいものであつた。(中略)だが不思議な
ことにこの種の大規模で 顕著な遺跡に対する考古学的研究は
きわめて少数の人の研究対象にしかならず、それも九州東北のものに
偏心か集中し瀬戸内・近畿地方のものは不当に無視されがちであつた。
その岡 豊元国氏の備後常成の調査は注目すべきものであつたがこれ
また学界から孤立したものとして終つた。結局朝鮮式山城はその対

象地域の象ともまた調査者の象とも中央は軽視し地方において細々とやられてきたという大きな特色を帯びているのである。

結局西川氏の言う『消されていった』という表現は朝鮮式山城というものが中央学界において研究対象として不当に扱われてきたということでありまして「そ-か、それで俺が知らなかつたんだな」と一応の疑念は解けたのですが、この論文の中に使われている「不当に」「無視され」「孤立した」という表現は私非常に好きでして、このことかますますこの問題にのめり込む結果を生じた記です。と申しますのは私は長らく近代史をやっておりまして、その中で特に草莽(ともう、こころ有るインテリゲンチヤの意)と呼ばれる人々に心魅かれておったのですが、この草莽こそまさしく「不当に無視され」「誤り伝へられ」歴史の中でどの様な位置をも与えられない「孤立した」ものとしてそれは在ったからで、この様に人が何とか隠、どう隠、どうとするもの、無視にすり抜けるやうとするもの、それらは多くの場合素直に重大な問題をその内に孕んでいるのだという解釈は、いはば私の性癖にまてなっているからです。ここで神籠石論争といわれる朝鮮式山城をめぐるこの論争が一時期学界をにぎわし、そして一斉に潮の退く如く沈黙していった過程と日本近代の歴史の流れをつまみ合せて見ること、朝鮮式山城のもつ問題性を浮き彫りにしてみたいというのが私の関心のあり方との①です。

ここに言われております「神籠石論争」なるものは、九州地方にあります高良山とか女山とかの山上列石の性格をめぐるて行なわれたものとして、その内容に關しましては古い資料でありますので仰々見る機会が少ないのですが、論文の標題やまた聞き話からおよその感じはつかふことができます。私の持っている古代山城嫌目録に於きますとこの論争の火付け役であり、また発表論文の数も一番多いという人が喜田貞吉という人ですが、『神籠石と磐境』『神籠石は果して山城か』という様な論文名から押して神籠石非山城説の有力な主張者であらと思われれます。古代の信仰対象として磐座というものがあり、その祭祀の場所である磐境がこの列石で囲まれた部分であるという神籠石=祭祀遺跡説がその内容ですが、これに対して岡野貞、谷井清一という人々が『所謂神籠石は山城址なり』として喜田説に反駁の論陣をはたすというのかこの論争の大概な経過です。しかしながらこの内容に關しましては『山城志』2号にも書いた様に現在までに結着がついておらずして特に今この論争に關するわけはならない理由というのは全くありません。そしては何故、何故この問題を論議したかという

と、こゝのことです。この神龜石論争は「歴史地理」とか「考古学雑誌」とかからた当時の専門誌上で専門の学者の間におこなわれたものですか。あるいは「〇〇論争」というものが成り立つには、この様な学者だけではなしに歴史研究のすゑ野を形成している私でありますか。皆さんの様な方々の一定程度の関心というものが存在し、そのことについてもっと知りたいんぢとか、と、こゝの雰囲気の様なものが必要ならばならない、と、こゝのことが必須の条件であると考えられます。それではどの時代的雰囲気とは何か。それを考えるために右の様な表を作って見ました。これは神龜石についての研究発表の数を年ごとに表記したものですけれど、これを説明しますと論文数のピークが明治33~36年頃として明治43年から大正2・3年にかけて存在します。として大正8年以降戦後に至るまでこの種の研究というものは多少の例外は含みつつも表面には現れてきません。この時代は政治史的にはどの様な時代であつたかといひますと、まず

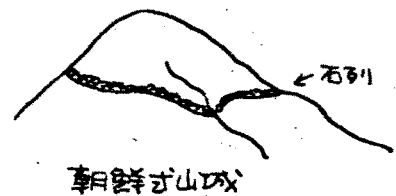
年代	論文数	年代	論文数
明治31	1	44	1
32	1	大正1	1
33	6	2	10
34	1	3	6
35	4	4	2
36	3	5	
37		6	1
38		7	1
39		8	
40		9	
41	2	10	
42		11	
43	19	12	

第一期のピークは日清戦争と日露戦争にはさまれた10年間の内にすっぽりとはまります。そして第二期のピークであります明治43年というのは日韓併合が行なわれた年であります。これらはいずれも朝鮮というものが政治的にも軍事的にも国民大衆の意識の上に大きく登場してくる時期であつたと言つると思ひます。日本における朝鮮式山城の研究が朝鮮に対する侵略・植民地支配という政治動向を機として発生し、それに続く民族的蔑視という時代状況の中でこの研究が持続し続けられなかつた困難さというものもこの表の数字はよく表していると思ひれます。このことについて先の西川さんは次の様に結んでおられます。

かつて中央のアカデミズムの学者たちは一度論争を起しなから、やがて忘れていた。あつていつかはそれは学界の感心事から消されたのである。それは存じてあつたか。朝鮮に対する植民地支配に研究方法までが毒されたからではないのか。皇国史観に迎合していつたからではないのだらうか。西日本各地の朝鮮式山城跡を消えようとした古代貴族と近代アカデミシャン。かれらの思想の中に等しく貫かれていゝもの。それは天皇制である。

朝鮮式山城 特に神籠石系山城といふものは執拗に歴史から抹殺されようとして来ました。一度目は古代貴族の責を幕政の御用史家の手におて、として二度目は明治の学者が何となくこれを研究していくことに不安をおぼえ自ら研究することも規制していったことによつてという風にです。しかしながらこのことは同時に古代山城といふものが国家の成り立ちの根底の部分に深く関わっていることの証明でもあると思います。として今後古代山城の解明が進めば進む程古代史の常識といふものは全く覆えられてしまうだろう。とそういう予感を今持っています。

(たんだん話し言葉で書くのが苦しくなってきたか) ーとこれではこの問題はこれ位にしておきまして、次は現在朝鮮式山城に対する研究は怎么样了あるのか、どの辺まで進んであるのかということにつきまして、若干話しをいきたいと思います。先程朝鮮式山城の構造のみに少し触れておきましたが、朝鮮式山城といふのは例えは日本の中世以降の山城と比較して大変異なっている、これは形態が異なっているばかりでなく「城」というものに対する思想が違ふんだということもまず頭に置いてもらいたいと思います。日本の中世の山城といふものを絵に画いてみますと頂上を本丸とし、階級にとり廊が作られるという放射状構造をなしています。これに対し朝鮮式山城は山頂部をぐるりととりまく円環構造といふべき形をしています。この違いがどういふことを意味するかといひますと、まず城内面積が格段に違う、といふことは内にもれる人数に大変な差があるといふことです。これももう少し詳しくいひますと中世山城といひますのは特殊な戦斗集団のみかこまれれば良かったし、これに見合った規模と施設があれば「すんだのて」ですが、朝鮮式山城の場合は附近住民の全てが事ある時そこに避難する「逃げ込み城」的な性格を強く持つてあるといふことです。朝鮮式山城の特徴とされる水門を始めとする給排水設備や倉庫群の存在などは全くこの性格を指し示しているといひましょう。この様に同じ山城とはいへども古代と中世のといへば全く性格が異なるのでありまして、古代山城の発展として、またいちバリエーションとして中世の山城がある訳ではないといふのは大切なこととてです。とては話の順序をしまして元祖朝鮮における山城は怎么样了あるのかということについて



(35)

も若干ふれておきましょう。まず山城の数は日本の場合現在23ヶ所しか発見されておりませんが、朝鮮ではさすが本家本元という感じで大体1500から2000の数か確認されております。さらに日本の場合と異なりまして朝鮮ではこの山城の使用された期間が非常に長いということが特徴であります。朝鮮半島では三韓時代に高地性集落というものが発生しましてこれが三国時代に至っての山城(日本では朝鮮式山城)の原初的形態であるとされています。なぜそう言えるかという、この高地性集落の遺跡(壕でありますとか貝塚でありますとか)と同じ場所(つまりそれを利用する形で)山城の石塁等が発見されるという例が非常に多いからです。さらに驚くべきことにはこの山城と山城を主体とした戦斗方式というものは中世以後も生きつづけ、大体李朝末期頃まで修繕に修繕を重ねつゝその命脈を保ったということが言われております。このことは朝鮮における山城方式がその地形や風土政治的環境によく合致したものであったということと同時に伝統的な生活思想から生み出されたものであるということもよく語っていると思います。これを図式化しますと朝鮮においては

高地性集落 → (朝鮮式)山城 (→は正しい発展)

であるのに対して日本では

高地性集落 *→ 朝鮮式山城 *→ 中世山城 (*→は不連続)

という風に場所的に利用されないのみならず、戦斗方式や城をめぐっての概念にまで断絶があるというのが特色です。

この日本の場合の山城の発展段階の不連続の現象に注目しユニークな学説を発表されている歴史者に李進熙さんがあげられます。

(突然ではあるかここでタリミットが来りました。これから李氏の説を紹介しその後神籠石系山城に関する前回あげておいた諸説について私りの検討を加えてみる予定であたが少しばかり時間が足りなかった。加えて李氏の説は通り一遍の紹介で終わるには余りに惜しい内容である。そこで今回の分を一応 Part 2 のく前編)とし次回にく後編)をのせるということこの事態の収拾案としたい。ごく私的な雑談と限られた読者という『山城先』の●条件に今回は全面的に甘えることにした。今はただ眠いー。

<つづく>

(36)

百代山城と諸説
高安城 (たかやすのき)

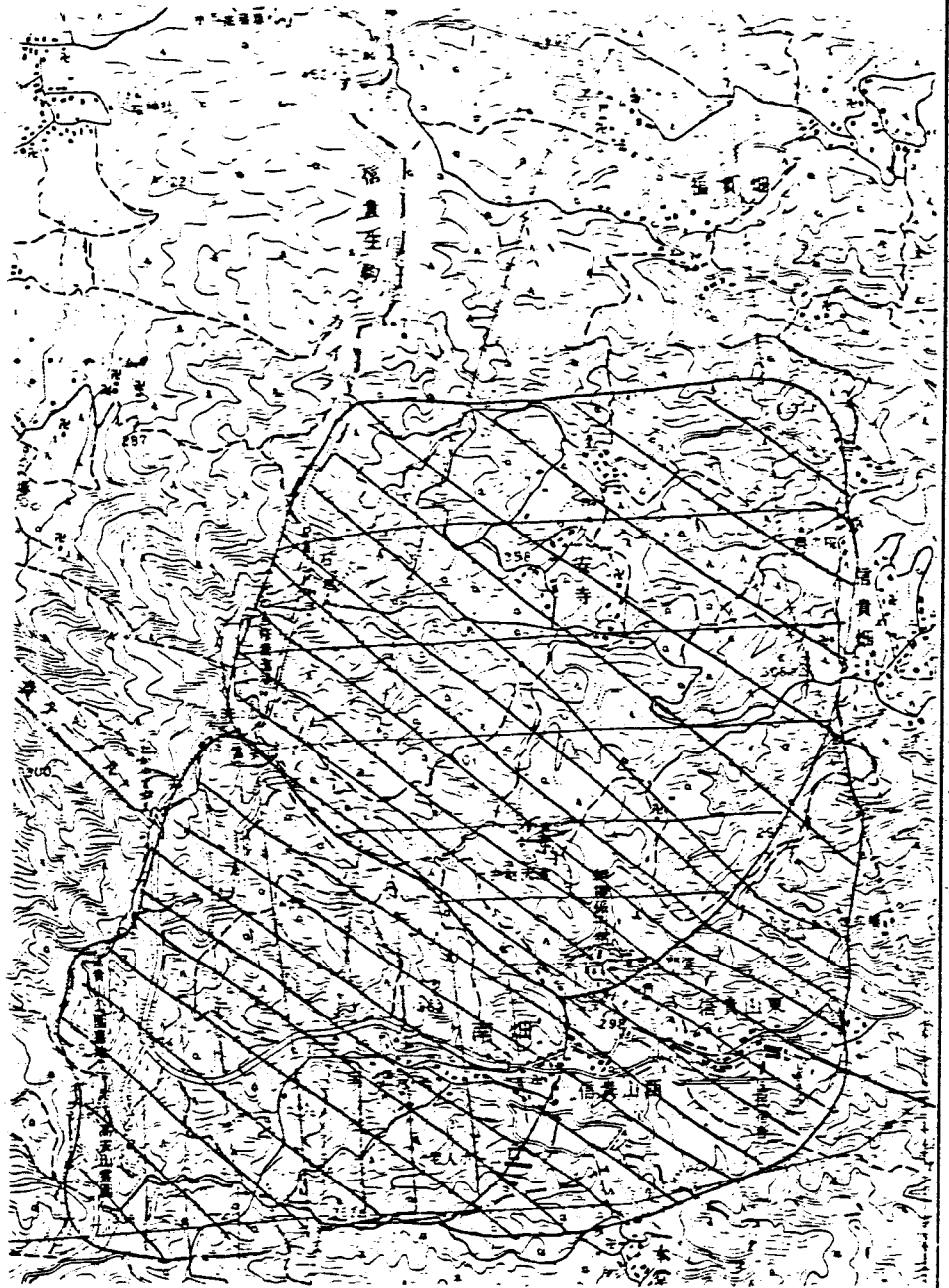
之森義人
大阪府・奈良県境の高安山一帯

①場所
城址はまだはっきり
解明されて
いないが、
昭和53年に
高安城と鎌
倉会の人達に
よって倉庫跡
の礎石が発
見されたが、あ
くまでも城域
の一部で、
その他の遺構
は不明で、
城域を諸
説あり、右図
にその一部の
説を表わす。

②縦線は
関野説

③横線は
千原町の城説

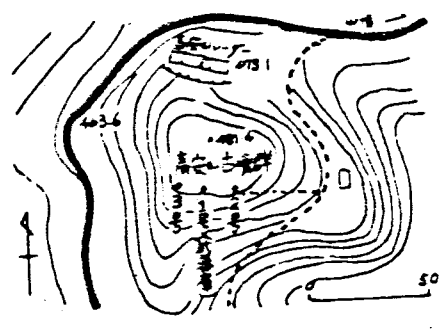
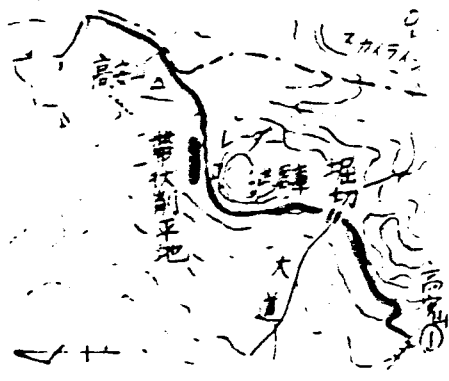
④斜線は樽松氏が想定



他に、相所の高安山、天冠山と諸説、高安山から十三山と加戸説、生馬山のカツガサキ等。

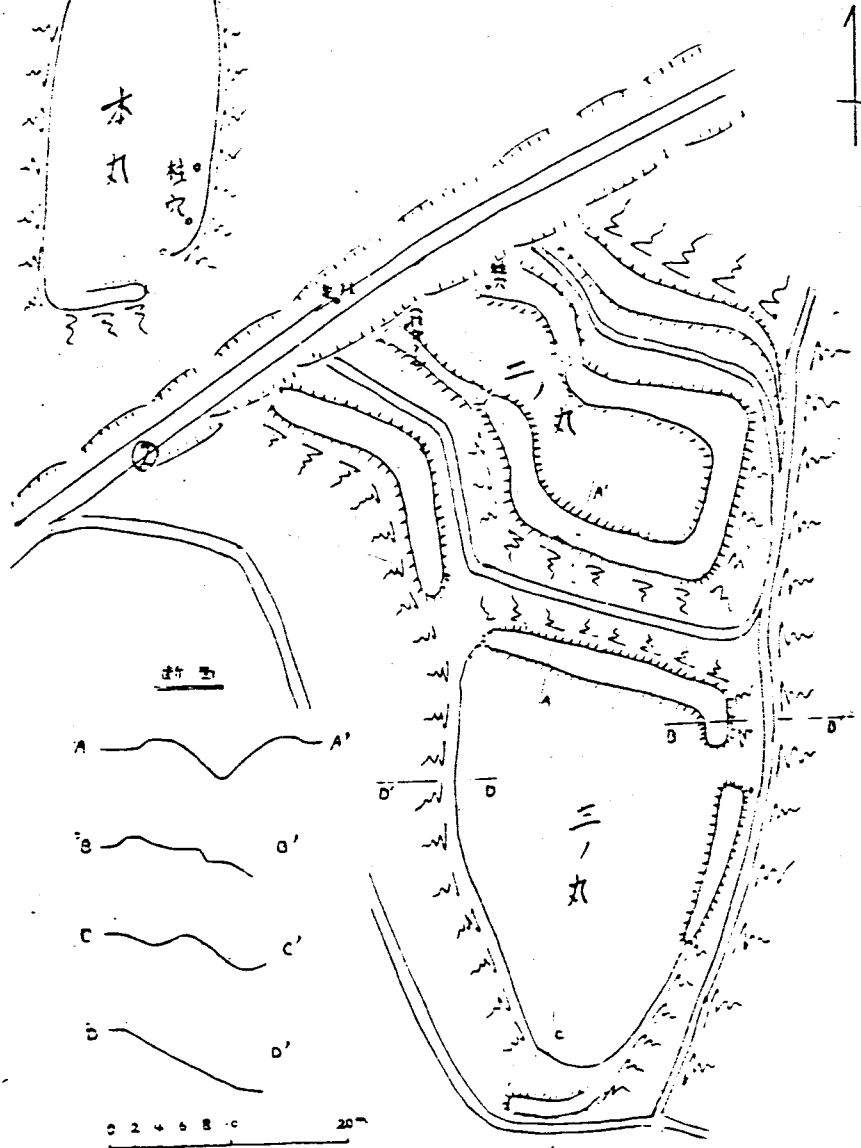
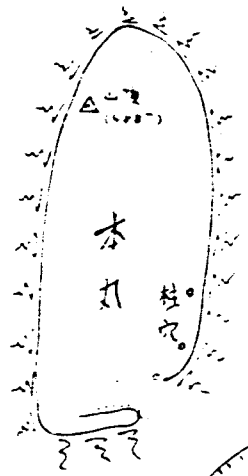
① 城内 遺構

右図の①の所までケールで盛り、この駅より南に展至台が削りそこより四方を望む。南の河内国府、南西に飛鳥京、西に平城京、東に難波京、北に平家京を控えている地で、北西に向い堀七口を過ぎて武藏野に行く。



高野山麓附近(土城)

諸元忠示大等 成天丁一拾五、〇〇
(銘巻式土城、対比、測量)



此武器庫は高安山古墳群の事で何故に此を武器庫かと言われと不明であるが、古老からの地名伝承で伝えられていて、高安城の武器庫と思われたので、発掘調査されたが、盗掘の為埋葬品はすくなく、武器の類は無かったが、此古墳の築造年代が高安城の築城とはほぼ同時代である事が土師器、須臾器の類により分かった。それに古老が此を武器庫と言う地名を伝承していたのは、盗掘した人が此から武器が出た人から人に伝わっていったのではなからうか？

なを、此古墳群は図で見る様に3基有り、その内、1号墳、2号墳が発掘された。そして1号墳は見学時に開口はしていたが入口に木の柵をしいたので内部は良く見えなかったが、長さ3M弱、幅2Mとの事である。2号墳は埋められているので見る事は出来なかったが、長さ1M、幅0.6Mとの事である。

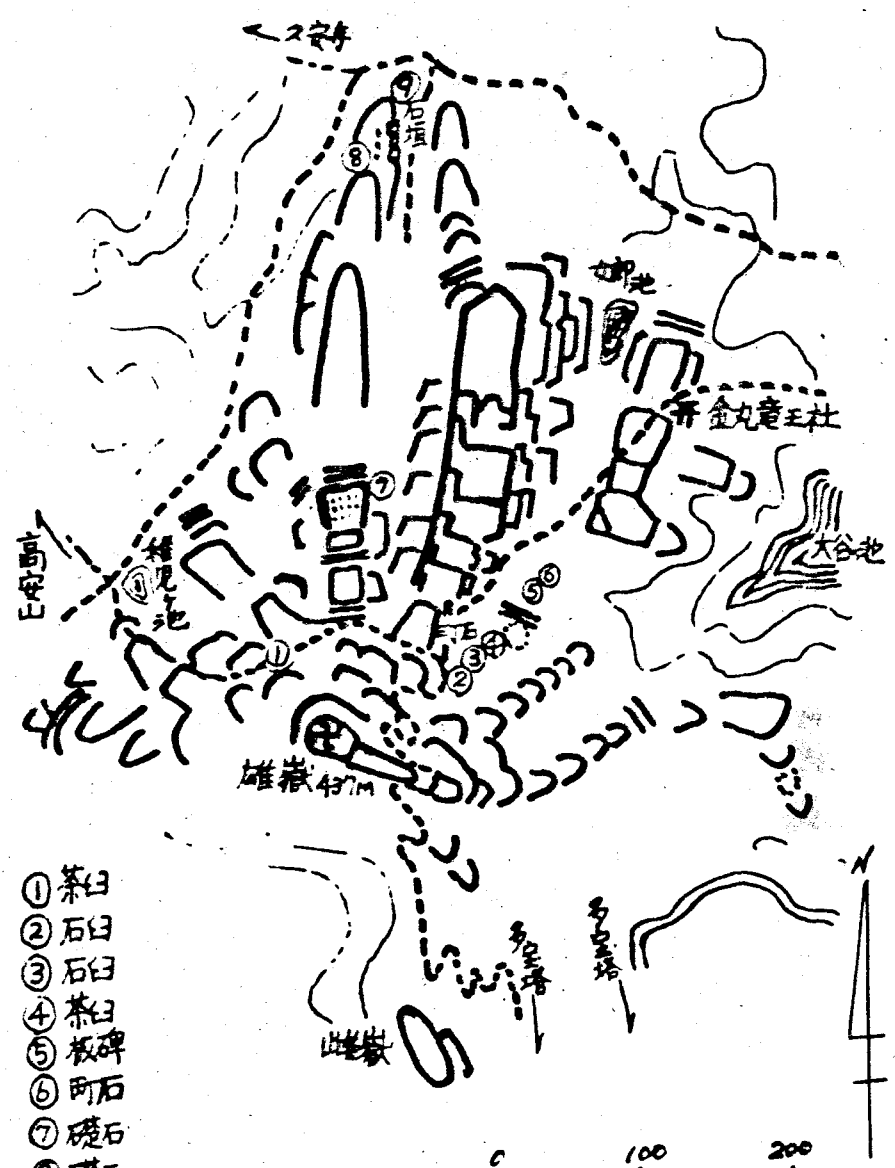
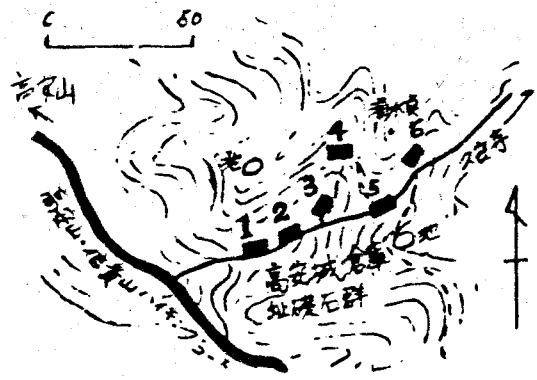
此武器庫より気象レーダーの様を通り、信貴山城の出城で高安峰と言われた所に向う。なお、高安山駅より武器庫、高安山山頂の尾根の稜線が土塁の様子を示していたが、発掘の結果は自然と言ふ事であった。

信貴山城の出城に着く。大川通しの手前の②の所より二ノ丸に向う。(此二ノ丸はただ便宜上私は高い方から本丸、二ノ丸、三ノ丸と付けたので、他の本丸はどの様になっているかは知りません)土塁、堀り七割、武者走り等が良く残っていて、中世山城の支城としての価値が良くわかる。二ノ丸より三ノ丸、本丸と行き、本丸にて少し休息。

この本丸からの眺めは良く信貴山城、高安城の城域と言われる十三ヶ所、そしてその北方に高見火峰の推定地、そして生馬山、西に河内平野が有り、出城(見張り台)としての機能はいかなく発掘されたと思うが、火峰としての役目では、此はあまりにも風が強く火峰としての機能は無いのではないかと。発掘の結果は、焼土もなく古代に使用されたという遺構は無く、遺物も土師器等が少し出土したというくらいである。そして此出城は信貴山城の出城であるが、後大養盛と言ふ者が信貴山城を攻撃する為の城として使用している。(原文不明。浅野文庫所蔵諸国古城之図 信貴山城を参照して下さい、名前をまちがえていたかも知れません)。本丸に有る柱穴の深さは約1M、少し埋め戻されて、少し浅く(約70cm)の二度柱が立てられている。また二ノ丸の所で柱穴が七割通りに残って有るが、此柱穴は深さ約2M有り、この柱穴は古代に使用されていたのではないだろうか？

此より高安城の倉庫跡と言われる石壁石地点に向う
高安山、信貴山八ヶ所をまわらず通る。この尾根がななく土塁線に見えて来るが、此は両方の谷を城内であるから関係ないであろう？

そしてこのハイキングコースより、礎石
 に向う道に曲る。(どこを曲るかと言われ
 て目印という物がありません。しかし、最
 初から、最後まで見るつもりであれば、A班
 より、B班行き等の指示板に目をつけま
 ますのでそれを目あてに行けばいいと思ひ
 ますが、はたして、どこどこへ行っているのか、
 私自身もわかりませんので、高安城を探
 る会の人達が、
 一般市民の人達
 に見学コースを歩
 かれる時もあり、
 それに同行するの
 がいい人良い人
 と思ひますが？
 道標等の整備は
 まだですので、なる
 べく此を矢の印
 人と歩かれるのが良い
 と思ひます。(私の場
 合は熊山御弘さん
 が居られましたので
 要領よく見まし
 ましたが、普通はな
 かなかくはないと
 思ひます)
 さて此では、
 第1~第6までの
 礎石が見つかり、
 第7が発掘され、
 礎石が露出して
 いました。



- ① 茶臼
- ② 石臼
- ③ 石臼
- ④ 茶臼
- ⑤ 板碑
- ⑥ 所石
- ⑦ 礎石
- ⑧ 礎石
- ⑨ 石垣

此第1石楚石の尾根の山側にカナヤ塚と云う物亦有、信貴山寺の鑄物出土した云う事です。(何十年前亦不明です)このカナヤ塚と云うのは高安城の城内の鑄物等を作った所ではないかと云う。

なお石楚石亦出土しているのは2号のみで後はトレンチ棒等でその石楚石を研ぎ認しているのみで尚平状態の上を歩くのみでは外となんらの変化はありませぬ。

そして信貴山城に進む。この信貴山城は関野説では城外になっているが、展望の点から内に入れた方がよい。(この関野説は故在大人々と不利な状況におかれては、石楚石の場所が城外であった。しかし、この関野説にある部分を言わぬという説が多数を示めているので不利と云う事も無いが)

なお此で信貴山城を城内に入れたが、展望の点は良いが、なおなお化泉斜が急なのでどうかと思われる。

信貴山城へ此で尾根のハヤシガ道を通らずに織田軍が攻めた時に通行したという水の古道を通る事にす。尾根より右側の谷に降りればよい。左側に小さな道亦有、此が水の古道である。しかし時の流れがその道は左側の山からの土砂と、右側の谷の水により道がほとんど崩れかけて人か一人通るのが勢いはないである。

此より 権足池の橋より信貴山城の郭に向う。

此 信貴山城には縦堀りはあるが、横堀りは一つも見られなかった。郭の数は百八つだと思ふ。その様上、多くの郭がある。しかし思つたほど本郭も大きくない。

此に四層の天宇閣がある云々相本当は夕闇城の誤りで有ると教へてくれた。(くわしくは高安城を探検の熊山休弘さんに聞いて下さい)簡単に、耳文不明、夕闇院日記を読んで下さい。夕闇城に人が来て(何月何日不明、人物名忘れま(大?)夕闇城に四層の天宇閣が有ったを見る。そして此人が何月何日上記の日と同じ日に信貴山城に行つて四層の天宇閣が有ったと言つたり夕闇城と信貴山城の書きまちがひ)と云う事です。(くわしくは熊山さんに、何時か此事で高安城を探検した時に発表すると思つたのでその資料を求めて下さい!私には此事はあまりわかりませぬので)

さて最後に焼き木が出土した云う果那院に向う。

此は別に焼き木が出土したと云うくらいしか有りませぬので別に書く此は有りませぬ。しかし此で焼き木が出土したと云う事は、このあたりには倉庫でもあり、大のであろうが。そしてその倉庫の石楚石がこの寺院の礎石に使用されているかどうかわからない。(しかし、私の見た感じと違ふし、他の人は探しているのだから、此を探しているかも知れなかつたであらう。

(41)

最後の総合感想と常城、茨城の系圖直について、

まず高軍城は高軍山を境に西に急傾斜をなしているが、東側にはさほど急峻ではない。烽火としての可能性の多い所は有るが因の強土等により眺望が良ければ烽火に結びつけたのは良くない。

信長山城(中世の山城で奈良県で規模は1,2位を争う)の概に中世山城が一部重複している。

山岳仏教(信長山寺)もあり、城内亦城外亦不明では有るが神感寺、一元の宮、修養道場が有るので修験道の聖地となっていたかも知れず、高尾山に祭祀遺跡、高地性集落跡も有る。

高軍山古墳群が山頂に3基。山麓に生教寺という古墳が多大に有る。

難波から河内国府、飛鳥宮へ向う道が城の南麓を通り、交通の要衝で有るが政治中心地から少し近く。

さて次では常城、茨城はどうか

備後國の安那郡、芦田郡と郡の場所まであかっているがまだ不明。

常城、青目寺(山岳仏教)祭祀跡らほむ、八尾山城が南、旗立山城が城内、眺望は良い。山麓にお墳、府中に国府? 小字多聞後らほむは無し。伝承七ツ池の大地伝説。土星はあか、青目寺関係の土星の系土有不明。

茨城 現在三説有る。(高垣不敏-山到深白山、豊元因-蔵王山、会-木之上)

山王山、標高亦100mと近い。山王山城、茶臼山城等至山中世山城として使用、古墳有、土星有、あか中世の物不明-現在消滅。宗道大國府? 小字馬木-ウマキ→ウカシ?

蔵王山、蔵王山城等中世山城として使用、北に石垣有り、云々現在不明、匠王寺跡有、古墳-山麓大有り、小字仁伍。

木之上、木之上城、中世山城として使用、山岳部完と思われ、瓦出土。山麓にお墳、小字、木之内→城之内? 北方眺望→目眺望という意味か?

木之上から木之内にかけての山の傾斜は急である、

次では説明、御案内、御意見等をお聞かせした熊山倭弘さんに感謝の意を表し、此で筆を上る。

(参考文献) 藤小くらむの、高軍城、第1巻~第6巻、河内高見峰

乃美宗勝は、田坂全慶とその一類の遺骸を下重に葬らせた。やがてこの事は小早川隆景から西條守護に報告されたが、何の沙汰も無かったと言ふ。同じ年、お館様と呼ばれた大内義隆も、老臣陶晴賢に襲われ自殺する。その事件は下剋上の歴史で有名であるが、この瀬戸の海兵・草深い木原の浜で哀れな生涯を終った田坂全慶の話は広く知られていない。それは敗者の宿命であろう。唯木原の里の人達は、全慶悲運の最期を起こした赤犬を飼つてはならぬと村伝度とし、永く守つた。そんな話を聞き伝えてゐる。

と言ふより他なかつた。

十

鶏飼元辰の語る、田坂全慶最期

の様は、次のようであつた。

木原に着いたのは五ツ過ぎ。宗勝殿を待って攻めようと、猫の顔程の浪なれば、逃げられぬよう、まづ手配りをした。その内、海辺の小屋の辺で、赤犬がしきりに吠え立てるのを見た。さてはあの小屋が不審なと思ひ、世良の源助・横道弥一を初めとして、五六人の者が近付くと、中から田坂興一兵衛殿が、槍を構えて切り掛つて来た。

続いて田坂九郎次郎殿、小坂の元助等一味徒党の者共が飛び出し、死に物狂いに戦つたので、味方に手負ひ、死人が出

る有様となつた。

「あれを射とれ。」と下知すれば、矢に投けられて田坂の者共は次々に討たれた。小屋に入つてみれば、全慶と五子供は自害した後であつた。



寄せていた。世に言う逆風である。

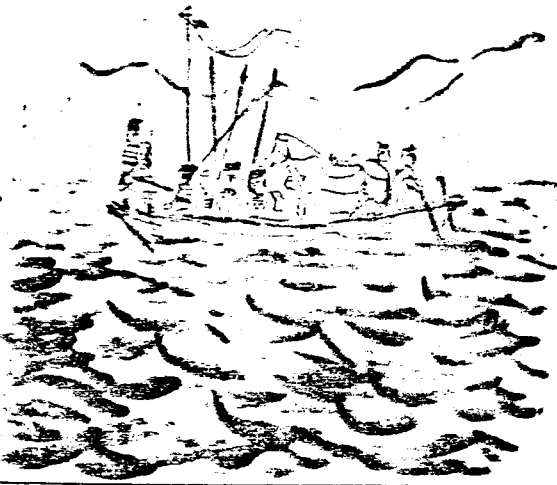
「進けとも舟はなかく進まない。特に二丁櫓の宗勝の乗る舟は、他の二般に次第に引き置かれた。

「急げや者共。」宗勝は舟子を励まし

たが、自然の力にはかなわない。

「致し方なし。あれゐの浜に舟を着けよ。」

宗勝は大声で下知した。



そこは福地と吉和の境の浜である。

上陸した一同は、それとはかりに木原を目指して駆け出した。しかし時既に遅く、途中で一行は、鬨こゝろの声を聞いたのである。仕舞った。宗勝は自分が着く迄討ってはならぬと命するべきだったと後悔したが、既に後の祭だった。

木原の浜に着いた時は、既に戦いは終わり、全慶一族は女子供に至るまで、息絶えた後であった。

「むごい。」宗勝は呟く。

主命とは言え、平日までは同じ沼田家の同朋である。女子供は連れ帰って三言に助命を請い、全慶と興一三衛父子を自刃させ、武士らしい最期を飾らせたのだ。名も無き雑兵の手で掛けさせたのは、無念

知人であり、この人に手引きを頼む事
としよう。」

一行は浜の万吉と言う春の家小屋
(夕テ舟と言つて舟虫を焼く材料を
仕舞つておく小屋)を借りて、暁の来
るのを待つ事とした。勿論見張りを
出して警戒する事を忘れてはいなかつ
たが、これには大きな誤算があつた。

ハ

吉和にあつた乃美宗勝の元にと
こを借つたが、一人の間者が到着した。
そして宗勝に告げるには。

「田坂の入道殿、夜前稲村を罷り出
で、十六人程で只今木原に到着。動き
を止めてござります。」と言ふの
である。

これは既に隆景が入道成敗を決めた
時から、殺刃の舞台を木原に決めた。田坂の
入道を誘ひ出す筋書きだつたのである。
運の盡きるは浮世の常、それとは知らぬ
全慶は、まだ十八才の隆景にまんまと
はめられてしまった。

九

全慶の所在を知つた乃美宗勝は、三隻
を二手に分けた。陸路を進む五十騎の行
に鶴飼元辰。五十騎は二艘の舟に乗り、
宗勝自身は、別の一艘で采配をとつた。とこ
ろが、若き日の宗勝の誤算がここにあつた。
吉和の差を出た三艘の舟の内、二艘は
五丁櫓、宗勝の乗る舟は二丁櫓である。
一行が櫓ぎ出した時、尾道水道西に位置し
する吉和舟は、白皮を立てて満潮が押し

「じゃあ。これやどうした事じゃい。

ここへ殿様が来たも人なら、命はなんほあってまたまらんぢゃあ。おんせんよ
う言つたららん。」驚いた市助は、主人
全慶に急を知らすべく、福地の方へ一目
敵に駆け出した。

やがて市助と全慶の一行は、木原の夢
畑で行き会った。市助から吉和に乃美
の伏勢ありと聞いた全慶は、行手を阻
まれ進退極まった。茫然とした全慶に
その時一子興一兵衛が言う。

「父上、この山の上には鳴鹿の古城とて、
昔は川殿の居られた砦がござる。かた
わぬまでも、これに籠り、一戦を逐げま
しよう。」しかし全慶は頭を振って言った。

「いや、女子供の口手まといまゐる。

今更あかくのも見まじい。神にも仏にも

見放されたこの全慶、最期は自刃する事
こそが幸ではないか。だが決して我が身を
敵に渡すな。それにしても憎い奴だ。

乃美の小冠者奴。」その様は嘆くとも、怨こ
とも見えなという。

自刃を一度は覚悟した全慶であるが
二回に止められ、一行は来た道を と引
き返した。浜辺に辿り着いた一行は、そこで
詮議を行ない、次のような策を採る事と
した。

「昼間の行動は人目に着く。しかも吉和
送への道は多勢に無勢、最早この道を通
る事はかなわぬ。夜を待って舟に乗り、因ノ
島の村上殿に助けを求め、幸か上策であ
ろう。幸い因ノ島の金蓮寺の住僧は古き

春風になどく揚柳とも言われ、文武兼備の人であつた。評の通り、彼は全慶成敗の際にも思慮深い行動を取っている。全慶成敗の風評を流した時は、既に逃走の行手に綱を掛けた後であつた。

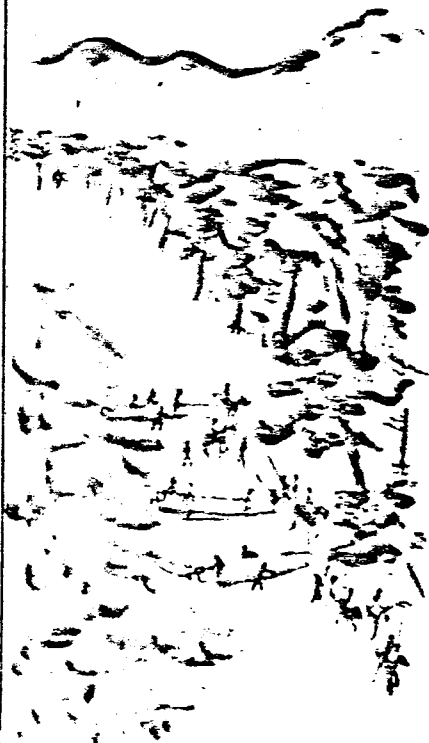
西方には梨羽勢が、南方の海上は竹原衆と浦の海賊が待ち受け、北方は大草等諸氏も憂ぐ。逃げると思はば、東方しか無かつた。

その一つ、三原より山間を通つて深・三成を抜ける道には、井上春忠と石原小次郎の手勢八十騎が、今かくと待ち構えていた。一方三原から糸崎・木原を通り尾道に至る道には、乃美宗勝が、隆景の吉田以来の附小姓、鶴飼元辰と共に、手勢百騎を引き連れ、忠海から

船に乗り、吉和の港に上陸していた。隆景は全慶が稲村城から動かねば、罪を鳴して自刃させ、城から出れば討つて取手段を構えていたのだ。

七

さて、先に主人全慶から舟の手配を命じられていた小者の市助は、吉和の原船を借りる事に成功し、主人の到着を今か今かと待っていた。そこへ忠海から来た乃美の軍勢が着き、上陸を始めた。



し実父・毛利元就は、次のような書状を送つて、隆景を諫める。

「軽々しく家中の者を成敗するのは、
 煩め。どんな事かあつても堪忍か大切
 である。方一にも内の者を成敗する
 など口にして、波風を立ててはいけな

い。隆景は父の諭しに従ひ、しばらく自
 重していたが、やがて全慶成敗の意を決
 する。討手の大将には、乃美新四郎宗
 勝、吉田以采の附小姓である片と环四
 郎、彦忠の兩名が命じられた。討手は
 軍勢の三度とすする間に、全慶に大厄
 する他氏の者より、稲村城に報らさ
 れた。全慶は逃散を定め、取る物こ
 取りをえず、一族の者と共に、夜居城・福村
 を出立した。これが入道全慶一族の

死出の旅路になるうとは、神ならぬ身の
 悲しさ、露程も知らなかつた。

六

瀬戸の夜明けは朝霧である。入道全
 慶は糸崎八幡宮の社殿で祈願し、社人に
 別れを告げた。

「昨日に変わる今日のお安、余りにもいとあ
 しうござる。木原までは岩場の磯、とても
 の事に、入道殿、危うき落ち方。

某^{あな}人巨に看かめ今の内に、小舟に乗せま
 らせ、御送り申す。いざ、これへ。」と案内す
 れば、

「忝けなき振る舞いかな」として入道は
 さくと落涙なされた。これは後在人が
 伝述した話である。

小早川隆景は、智將と言われている。又

状によつて停止させられた。

それは大内義隆から標梨盛平に宛てた
物で、次のような内容であった。「小早川家
の象中家が二つに分かれて争つてゐると
はもつこの他である。当家の代官である、
弘中隆兼の扱いに任せて、双方が事を収
めるようにせよ。」隆兼は乃美派に軍配



を上げ、小早川隆景は小早川氏の惣
領家を継ぐ事となつた。隆景は竹原
から沼田の高山城に入城、又鶴丸の妹
と夫婦の式を城中であげる。又鶴丸
は隠居、剃髪して禅宗に帰依し、
教真寺に入山した。法名を文空元結
と言ふ。これで小早川氏の内紛は、一
件落着する筈であつた。

五

論争に敗れた田坂全慶は、本拠地
小坂郷の羅村城に隠棲した。沼田
小早川家を継ぎ、晴れ、高山城の主
となつた小早川隆景であるが、その心は
穏やかではなかつた。自分の高山城入
城を阻止せんとした、入道全慶への
憎悪は強く、その成敗を考へてゐた。しか

血筋に關わりなく、他の有力大名から養子を迎へ、主君と仰ぐ事はさして希ではなかつた。夏えていた惣領家たる沼田小早川氏にとり、昔から独立し惣領家を凌ぐ勢いを持つ竹流・竹原小早川氏との合体は、土肥景平以采の由緒ある小早川氏が繁栄する、絶好の機会であつた。

小原隆言に、隆景による沼田小早川祖統をもちかけられた乃美隆興は、この案に賛同、他の一族、宿老等に働きかけた。この結果梨羽氏、小泉氏等が支持にまわり更に又鶴丸の帰城を積極的に行つて来た。梨羽盛平までがこれに同意するに至つた。沼田小早川家の宿老達の意向は、隆景を迎へる方向に

大きく動いた。

これに對して、田取入道全慶(是業)や土倉氏等、多くの被官人達は、たとへば目でも又鶴丸を主と仰ぐべきで、もしそれが不都合ならば、一門親類衆の中から家督を選ぶべきである。他氏の隆景を迎へるのは血脈を絶つ事だ、と反對論を唱へた。

四

沼田小早川家の家督をめぐる論争は、高山城大騒動で幾度も行なわれた。初めは又鶴丸を隠退させる大義名分が無いとして、田取全慶等反對派が優位であつた。しかし破言の真田三井、横見土井、金山神足の各氏は、欲につられて寝返り、乃美派となる。結局この論争は、一連の事

弘中隆兼は又鶴丸を呼と寄せると、この役またす奴。」と罵り、宇に入れしみました。驚いたのは沼田小早川氏の宿老・棟梨盛平である。彼は八方奔走して許しを請うたが、隆兼は許さうとしない。最後の手段として、京都の足利将軍に使いを走らせた。しかし既に行軍の権力は弱体化しており、大内氏を動かす事はできなかつた。

泣く泣く盛平は、歴々の宿老と共に、吉田の毛利元就を訪ね、助言を請うた。しかし元就は調略の大家であり、三子隆景による沼田小早川家の相続を目論んでいたのである。

さて、西條守義弘中隆兼には、小原

隆景という、補佐役の如き者が居た。彼は大内勢が神辺城の山名理興を攻めた時、山名の家臣、沼隈孝厚之將に任ずる榎山備中守を籠絡し、理興を裏切らせた。毛利元就と負けず劣らずの調略家なのである。

彼は沼田小早川氏の有力な庶流、乃美隆興を最初に説得した。曰く「旨目の又鶴丸を隠居させ、その妹と竹原小早川の隆景とをめぐあわせて、沼田竹原両小早川氏を合体させたらいかがか。」と。隆景は大内氏の賞えめてたく、実父毛利元就は玄孫の武将で一番の出陣人、将来の奏展も充分期待できる。彼を養子に迎える事は、沼田小早川氏の家中に将来の繁栄を約束してくれるのである。

当時弱小大名が戦国期を生き抜く為、

この時大内勢として従軍していた沼田小早川正平は、退却の途中で討死にしてみました。家督を嗣いだのは、盲目の幼い又鶴丸（繁平）であつた。戦国乱世の時、盲目の主君を戴く事は一族の者達にとつて不安な物であつた。

天文十三年十月、尼子氏の内以最強の武力を誇る經久の次男・国久父子に率いられた新宮覚にこれ又宿老千にその人ありと恐れられた河副・木林賜の侍大将達。これ等から成る尼子の軍勢が南下、沼田の高山城を包圍攻撃した。この時は沼田小早川の宿老・隆、乃美・梨羽、掠梨、小泉等が、又鶴丸を大将として城に立て籠り、懸命に

防ぎ、退けたのである。

さて、大内義隆は、分国の経営に、四條守諱と称して槌山城に、弘中隆兼を配していた。又鶴丸は、隆兼の賞えが甚だ悪かつた。それに引き替え、沼田小早川氏の庶流、竹原小早川の当主徳寿丸（隆景）は大内義隆に可愛がられ、偏諱を賜わり小早川又四郎隆景を称していた。隆景は毛利元就の三男で、備後の尼子勢力の拠点、山名理興の端城を攻撃して、まづ手柄を現わした。やがて押四城攻撃に於いて、目撃まじりの活躍をし、その功で坪生五ヶ荘と、周防国にも一ヶ所の二百五十石の地を与えられた。当時竹原系は、「登る朝日の徳寿丸、しすむ夕日の又鶴丸」と沼田系を馬鹿にしたと、言い伝えられる。

して、夜中歩き、疲れていた。全慶は首に向かいて声を細め、話し出した。

「ここまで来れば、後一息じゃ。これから先、木原と申す処までは、海端で道が無い。今しばらくもすると、夜も明けよう。

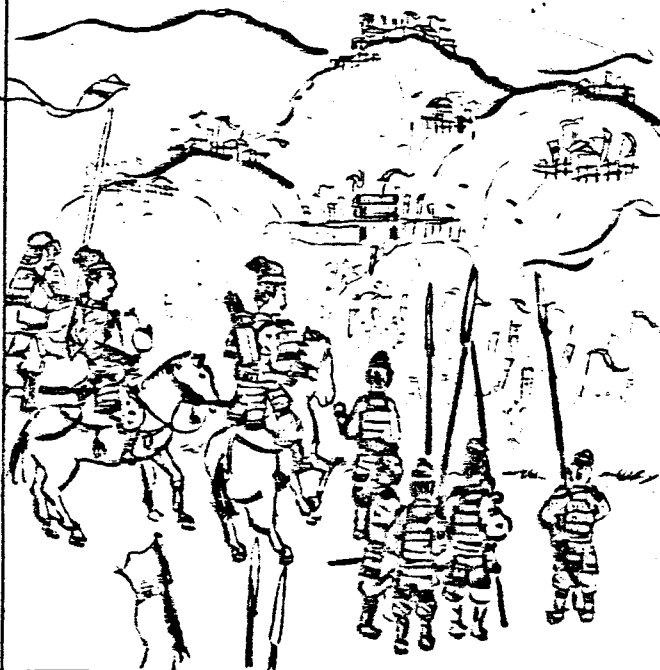
明るくなれば、足元も見える。やがて吉和に行けばもう大丈夫じゃ。市助が待ってあるう程に、元氣を出せ。」

全慶は夜前退散するに当って、幼い孫一万（後の田坂一郎左衛門隆貞）を大方様（小早川正平夫人）に預ける為、小者を付けて行かせていた。「無事行ったであるうか。」全慶はその事が気かかりだった。

二一

思えば昨年来、沼田小早川家の相統

をめぐって、論争が続えなかった。それは惣領小早川正平の戦死を機として起った。天文十二年、大内勢は大挙して出雲へ進撃、尼子の本城、富田の月山城を攻撃した。しかし備雲石十三人衆の侍大将達の、足並の乱れから敗軍、総退却する結果となった。



(お)

かと言えは、それも違ふ。ならば何
かと問えは、こうである。

江戸時代の初め頃、山陽道は沼隈
郡今津村から御調郡三成村、深村を
通っていた。これを沼隈郡高須村か

ら御調郡後地村を通り、尾道を経て、
栗原、吉和、糸崎を通って三原に至
る海岸線が出来た。その通り道の途
中に、風景よき磯辺があつて木原と
言う。その木原の昔話を老漁師が語
つたのを、旅人が珍らしき話と喧
伝したという噂。

尾道と糸崎の間の山陽線沿いに
日赤糸崎病院がある。その近くの、
総路の傍らに、五輪塔の墓石と、角

塔の墓石とか、並んで立っている。
これは天文二十年、この地で討
たれた沼田小早川氏譜代の重臣、
田坂全慶とその一族の墓である。

興一、追手の者は見えぬか。

はい、三原の浦に見えます。火
は、漁火イサリだけにござります。

一行は女子供を合わせて十六人。
田坂全慶の一族である。時は寅
の刻、今の時間で午前四時頃。

天文二十年春三月、節句を過
ぎた日の早朝に、一行は糸崎ハ
幡宮の境内で一息ついていた。

夜前彼等は、家城の稲村を出立

(2)

遠腹の弟達二人を虐殺した。

二、毛利元就の次男元春、新庄

大朝、吉川家と相続の時、先

の当主吉川興経を謀殺した。

三、毛利元就の三子隆景、沼田の

本郷小早川惣領家を相続の時、田

坂入道全慶を殺害した。

四、神辺道上の城主、杉原忠興の

遺領相続争いの時、備中井原庄

の藤井入道祐玄が戦没した。

五、杉原盛重の二子、遺領相続の

強欲心を起こし、兄元盛を謀

殺した。その悪事露見し、伯州

羽衣石辺にて誅腹を切り断絶。

其時大江の毛利氏、杉原盛重の

血脈者を一人残らず虐殺して、杉原氏の領地を没収した。

六、室町幕府の將軍家足利氏の一

族、九州探題職、渋川氏の没落は

宮、杉原、小早川三氏によって

成された。中でも小早川隆景は

その腹臣井上弥四郎春忠を使って

渋川氏の名跡まで絶ち、備後地

方に僅かに散在する渋川氏の所

領、御調郡八幡荘、同吉和保、

同歌島荘、沼隈郡山南郷、同藁

江荘等を押領した。

これから語る物語は、全く有った

実説ではない。では創作した小説

(1)

田坂入道全慶の死

藤井高一郎編

相続というのは、片立な言い方では、財力、権力、名誉力などを受け継ぐ事を言っている。その受け継ぐ者が横奴以上の時、争奪が起まる。それは親子であることが元弟であつても、終いには殺し合ふのだ。又譲りたくないのに渡せと言つて、骨肉の争いをして来た。その事は今も所々、大なり小なり聞く事であると思つてゐる。更に主題の事は、天皇家は元より、各階各層に於てあく事なく繰り返してゐる。この地方でも後の

世まで語り継がれてゐる事柄の内、特にその主な物を一部冬書きにして紹介して御覧せする。

尚更に小早川隆景が、沼田の惣領家を相続した時の裏斬しの題本を、読んで歎くようにと思つて、これを書き始めた。勿論私は、この種の物を書くのは慣れてゐない。裏斬しを行く舞台の表現、登場する人物の心理、或いは時代の表現等、巧く書けるものか、一紙の不意を感じながら、筆を走りさせてゐる。

記

順序不同

一、毛利元就惣領家を継いだ時、

編集後記

気候もだんだんゆるんてまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。
 冬のキビしさに耐え抜き当会の意気はますます盛んであります。
 『山城志』3号も今回は藤井先生の丈河ドラマや新鏡井川君の力作
 も加え、かなり充実したものに仕上がったのではないかと考えています。
 最近ゆか会が各果の耳目を集めていると聞き「うん、どうかどうか」と
 多少いい気分になりかけたところ「あんたに早ハヤースどっつぱしているが
 いつ急切れかしてつぶれるだろう」という意味で愛味を持たれてはいるど
 です。せの中には何んと「草履通」や「世間通」というものの多いことか。
 私らはかかるフサけた連中のハヤ限り境地でも今ハヤースもホトホト
 所存です。しかしながら私らはこの義なきで「感謝します」と言えあが
 る程学生、ぼくは存い。次のことだけは確認しておこう。まぎらく向こう海
 を出ない内に我々の会はこの世間で一番ユニークな歴史集団に存記ある
 ことは間違いない。その縁となり、集ってまた盛んでやんないぞ。

(支費 グレート東国)

備陽史探訪の会 城郭研究会発行
 昭和58年3月6日 『山城志』 第2巻 2号
 部会連絡所 福山市新浜町1-2 ⁴/₁₇₀
 七森業人 0849(53)0370

皆様の感想・批評を御待ちしております。

